女學雜誌

一册六錢

各土曜日發兌

第百九拾五號

當府内無郵税

郵税五厘

Digitized by Google

Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 195. 11TH JANUARY. 1890.

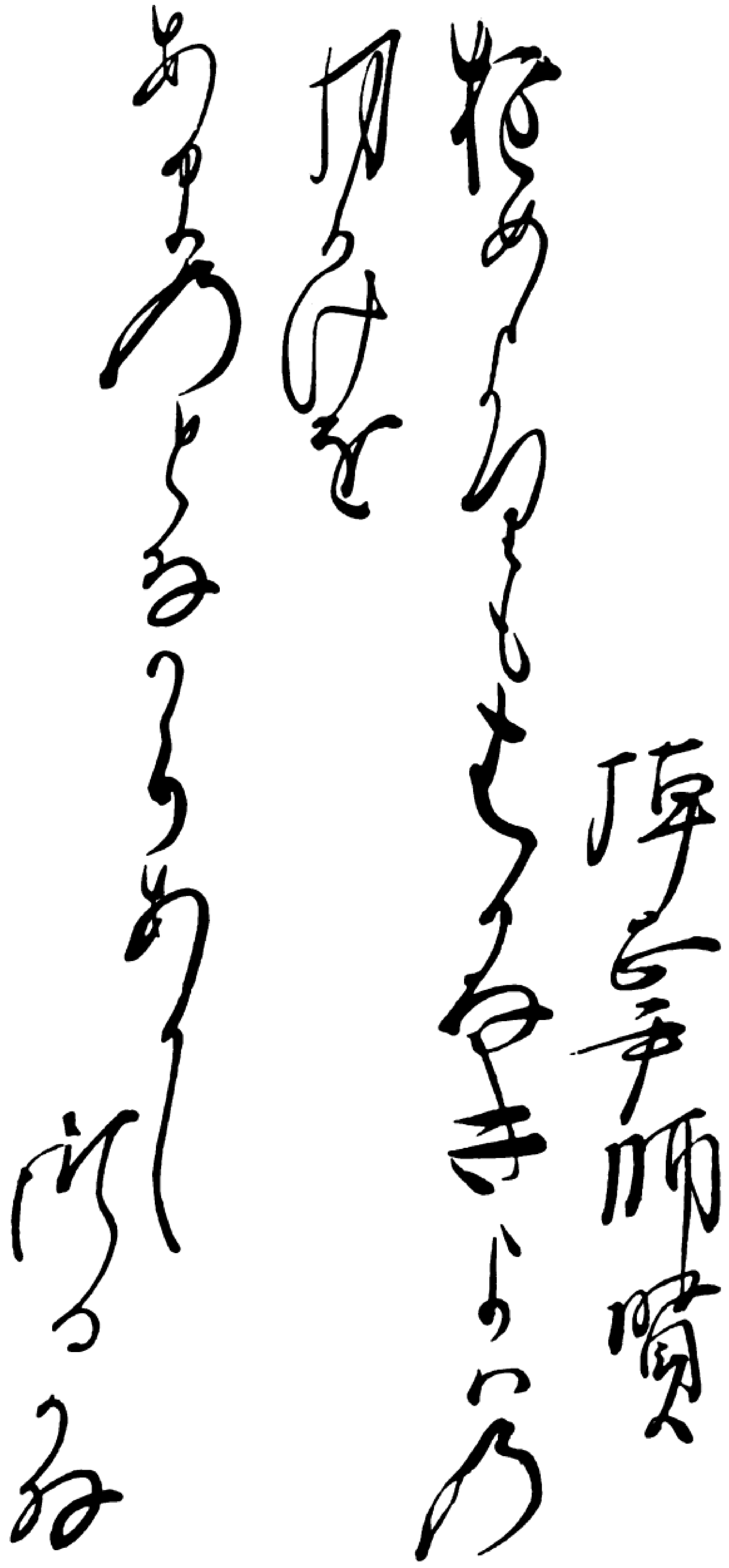
EDITORIAL:—Impoliteness of the Metropolitans. On Reading "The Record of the True Imperial Dynasty."
LEADING ARTICLES:—Cause of the Fall of Literature; How to Encourage Literature. (Ganryo Kyoshi).
CRITICAL NOTES:—Supplement of the "Nations' Friend." The "Lily of the Valley."
MISCELLANEOUS:—Hygiene of Children in January. Father and Husband. Different Kinds of Headache. Happy or Unhappy? Love. A Peculiae Picture. On the Picture of six Gods and a goddess (Mr. S. KIKUCHI.) A Chair of Jewels.
NOVEL:—The Story of Innac Ardene.
CONTRIBUTED ARTICLES:—Letter to the Own Child. Concerning the Abolition Prostitution.
OPEN LETTERS:—Absence or Presence of Prose Writers. (Mr. DANSETSU YAMANOUCHI). An Inquiry.
NOTES AND NEWS:—The Ladies of the Cabinet Ministers. Duels buried. How to Exterpate "Soshi." Gessho and Naobumi Aibara. The End of Great Men. Mr. Parnell and the Editor of the Hochi Shimbun. Count ITAGAKI's motives. Whether is more Glorious? A Lady on the Tour around the World. Concerning the Abolition of Prostitution.
CONCERNING WOMEN:—Mercifulness of Her Imperial Majesty, the Empress. The Singing Club of the "Girls." High School Celebration in the Female Normal School. Establishment of another Industrial School for Girls. The Ladies Horticultural Association. International Exposition at Paris. Soceity for the Improvement of Prisons in America. Women's Mercantile Association.
NOTES ON THE NEWEST ISSUES.
SINCE OUR LAST ISSUE.

第百九十五號目錄

社說　都人士の無禮○神皇正統記を讀む
論說　文學極衰の原因、及び其矯正法（雁陵生）
批評　國民之友新年附錄○谷間の姫百合
雜錄　ヒアワサの獵○一月中小兒の養生○父と夫と何れか尊とき○頭痛に色々あり○孰れか幸、孰れか不幸○愛情論○不思議なる畵○七福神圖記（菊池三溪）○玉の輿
小說　イナツク、アーデン物語
寄書　兒ヨハンに與ふる書○廢娼の事に就きて（四海漁夫）
開書　文章家の有無（山内暖雪）○交詢
時事　諸大臣の奥樣○決闘を葬むる○壯士撲滅の策○月照と相原尙褧○英雄の末路○パアネル氏及報知記者○板垣伯の裏情○去來何れか榮轉○躶躰畵却下○世界周遊の婦人○廢娼記事○廢娼論料
女報　皇后陛下の御仁惠○中山二位局○高等女學校唱歌會○女子師範學校の祝賀○女子授產學校○產婆免狀下附○貴婦人園藝會○パリス大博覽會○米國監獄改良會○女子商業會

Digitized by Google
Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

後醍醐天皇親筆



Digitized by Google
Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

女學雜誌 第百九十五號
明治二十三年一月十一日發兌

社說

○都人士の無情

人生の樂しみは抑そも何者にてある乎、酒を飲み慾に溺るゝを以て樂しみとするものもあれど此は固より吾人が聞くべきの答にはあらず、彼の非義を惡くみ不善に憤ふり慨然身を犧牲にして公衆の爲めよ正しきに盡力するなど、頗ぶる樂しきの事にてあるべし、同じく仁義大道の爲に一身を献げて五脉を四つ裂にする迄も愛の爲めに働らくあんど此上もなき爽快の事と思はる、吾人生平此類の樂しみの實に眞の樂しみにてあることを悟り、亦好みて此かる樂をば樂しまんとこそ心掛るなれども、抑そも斯る心掛の爲めに樂しむは樂しみの變あるものにして、本來和樂和平の象あるものにはあらざるべし、現に正義自由の爲に身を苦しめつゝ倘ほ心に樂しみあるを得るは、葢し吾の苦しむ所ろは即はち他の人の后に樂しむ所ろありと思へばあるべし、然らば今に於て直に人と共に樂みを爲ことを得ば、此の樂しみや眞に望む所ろの樂しみを現實に得たるなり、豈に如此くに樂きことあらんや。左れば人生和平の樂しみは、人々相愛し相睦み陶然俗情を忘れて無我に談笑すること是れ也、賢者も其賢を忘れ、愚者も其愚を思わず、貴きも賤しきも只だ何となく慕われて、段階身分などを夢の如くに忘却し、恰かも万人皆な子供遊びをするかの如くよ思ひて相親しみ戯むるゝの時、即はち是れ人生無上の樂き時也。然らば世に如此き塲合何の時に於て之れありやと云ふに、他なし、盆節季と云ひ、特に正月お祭りなど云へるの時即はち之なり、斯る折には人々平生の身分を悉とく忘れ、公卿は冠を脱ぎ百姓は草鞋を棄て相抱きて踏舞して見んと迄てにも思ふものあり、苟くも常に勉强してあるものは特に此塲合を樂しく思ふ、又た平常心にもなき權柄を搆へてわざと窮屈に身を處したるものは倘更に斯る塲合を戀しく思ふなり、彼の温泉塲などに遊べるものを見よ、孰れか相手欲しゝと思ふて友の高き卑きを擇ぶの慾なし、總じて人間は或る時には皆な斯の如き眞心あるものなれど、常には身分、家柄、身代など云へる我慢に縛られて天性を伸し難く抑え居ることなり、左れば正月など云へる四民ともに歡樂して天下皆な無禮講の遊びを爲す如き塲合となれば、人性は躍り上り卒然覊を脱して其の天眞を現わすものなり。

Digitized by Google
Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

世は實に砂漠の如し、冷やかにもあり淋しくもあり凄まじくもあり恐ろしくもあるものなり、然るに此内に人をして安眠せしむるを得るはホームと云ふ家族の所ろ〳〵に存するゆえなり、然るに人々の樂しきはホームに立ちこもる時のみにて、世に出れば悉とく惡魔に出合ひ、隣近所の人間も皆な人間にてあらずと思ひ、永生万年常に如此しと覺悟するは實に心細きことにあらずや、人間かと鬼にあらず遠く見れば何人も祇園の夜叉の如くなれど、近づきてよく〳〵見れば皆な忠盛の如くに發明するものと聞けば、世上の人々をして先づ近しく交際せしめ、其窮屈の門を開き、眞心の戸を明放し、近く寄つて相安んずる所を見せしむるの工夫專一と云ふべし、之を爲すの時は万人皆な幼ならしくありて樂しむの時即はち節季正月の如き時にあり、吾人は甚はだ斯る塲合を重んずるもの也。

日本も昔しは此の道理を能く心得たりと見え、斯る折には親類近所の親しみ一層に美しきのみか、平素疎遠に流れ居るものも此時には笑つて相ひ往來したり、然るに近年に至りては此美風頓に減じ、盆にても正月にても空吹く風と心得て樂しみ睦むもの少なし、盆と云ふとは今の時節にて少しく異樣に聞ゆと云へば先づ暫らく言はず置くも、正月に至りては昔しも今も目出度事に相違ある可らず、然るに此頃の人は何と思ふ處存のあるにや甚たく之を冷遇し、美なる新年を迎へても左して祝ひもせず、碌に人と遊びもせず、甚しきは近縣旅行とか申して平生の友人を見棄て、物憂きものと云ふ旅をして他人斗りの中に態々出掛るなど、分らぬとなり、此際一家親族及び朋友と共に近郷に遊ぶなどの旅行は固より例外なれど、夫れよりも嚴びしきは普請中ゆへ來賀を謝絶すとか、例年の通りお禮をせぬとか申し、一層惡むべきは何々に留連中ゆへ年賀せずなど云ふものあるに至ては、世人の謬りも甚しと云ふべし、而して斯る人は物事の道理を知ぬ輩らかと云ふに、中々に左樣にてはなく、其の同類は田舍より東京に多く、東京にても昔し風の人よりは新主義の人に多く、中には之を西洋の風なり文明の風なりなどと自慢して左樣に致す者あり、此に至ては其迷ひも窮まれりと云ふべし。

吾人は文明の風は實に何如なる者にてあるを知ず、左れど西洋の風に至ては少か聞る所ろあり、西洋人は其國にて所云る盆節季の如きものを極めて大切にし、斯る折は朋友親戚打集ひて團欒するを上なき樂しみとせり、例へばクリスマスと云ふ恰かも我國の新年の如き季節に至れば、一家族必らず寄集

まるの例にて、書生は塾舍より歸り、良人は旅行先より歸り、親子夫婦昆弟一堂に集まり和樂せずと云ふとなし、而して其の樂しむと宵に一家族にのみ限らず、併せて他人の幸福を祈り其樂しみを希ふとの旨にて、樣々の珍らしき品を朋友知己に贈り、余程の遠方に在るものにも祝詞名刺カードなんどを送り、中には意外のシャレなどをも申し送りて、彼我ともに天の惠幸を祝し、万福を壽ぶく、其情洋々として掬すべし、西洋人が季節の禮儀に頓着せずなど思ふは大なる誤にして、此の誤を賢こきとのやうに思ひて利巧ぶるに至りては、いよ〳〵誤まれりと云ふべし、都の人は斯なしてこそ西洋めけりと思ふなるべし、左れど悲しきかな此の一點に於ては彼の昔し風の儀式がたき田舍人こそ反りて西洋人に似て、更に開化に進めりと云ハれんと然るべう思はるゝなり。

但し今日の如く此心得方の亂雜となれるは、此迄の致し方の只だ儀式にのみ流れて、所云る情を失なひ、たゞ味わひなき骨の如きものとのみなれるに由りて、氣慨あるものゝ頗ぶる之を不平となし扨てはわざと斯る無頓着の亂暴を爲すともなれるなるべし、即ハち陰雲密塞し、天氣平ならずして、一聲の霹靂あるに似たり、左れば、此の亂雜によりて面白からぬ死せる儀式を打破し、異日更に快晴有情の眞交際を起すに至るべきか、少さか希望ありと云ふべし。ゆえに吾人は一と度びは都人士の心掛なきに歎息し、二度びは其心掛なき上に揚々として自得するの面惡きに憤ふり乍ら、更に思返して一陽來復の期あらんとを望み、今の冷凄たる枯木寒月を見て、遠からず新年の來らん日を、相ひ待つと云ふ。

○神皇正統記を讀む

昔し北畠親房と云へる愛國者ありけり、南朝光うすく、忠臣勢ひを失ひ、万世連綿たる皇室の逆賊の爲に大ひに傷つけられんとするを見て甚たく憤ふり、兵馬亂戰の間だに書六卷を著わし、名づけて神皇正統記と云へり。時に帝は芳野の假宮に行在ましまし、四面の官軍數度び利を失なひて、正道の世に存らふる宛ながら孤城落日の姿たに似たれど、抑も天津日嗣の天皇は世々たゞ一と柱にして、天に二日なき如く地に二つの皇帝あらん筈なく、神祖天照太神より此方、たゞ正統を嗣ぎ神の命を蒙むりたるの皇子のみ位に即き一天万乘の權らを握らせ玉ふべきの旨は、此國あらん限り日月と共に長しなへに明らかなるべしとて、扨ては九十六代の正統を叙し、神威

Digitized by Google　　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

の當に在るべきの地を示し、天暫らく晦冥せるとき千古消えざるの大光明を發ちたりき。

吾人其書を見るに、文章の雅なる中に極まりて雄々しき氣象現われたり、たゞ此の文字のみを以てするとも既に百世の名文なるに、全篇に旨とする所ろは忠君愛國の大道にして、不義を懲らし正しきを勵ますの趣き鬱勃として、慷慨の情紙の面てに溢れ、讀むものをして坐ろに感激し涙にむせばしむ。左れば爾來八百余年を經るの間だ、書籍あると數ふるに堪へず人其の万一の名をすら記臆し得がたき程なるに、此書の名は未だ讀まざるの人をも動かし、既に讀みたるものをば其全心を動かし、苟くも志あらんものは之に接して忠義尊皇の念を奮ひ起さずと云ことなし。親房沒后、南朝遂に北朝に合し、逆臣高氏一時榮華を極めたるが如しと云へど、后ち足利氏を亡ぼしたる者は忠君の情特に渥かりける織田信長にてあり、織田氏亡び徳川氏代りて權を專ぱらにせしと云へど、亦た幕府を倒して王政維新の大業を成就したるは、同じく勤王の武士にてありける、而して此等忠君の情は主として神皇正統記の爲に喚起せられたるに非ざること至りて尠し。其書眞に小きものありと云へど、喩へば源泉の最と細くして遂に大流を作るに似たり、或は大日本史となり、日本外史となり、或は湊川の碑文となり、平野が笛となりて、遂に滿天下に帝室を尊とむの忠情を溢らさしめぬ。

神皇正統記六巻の精神は其の終の巻にあり、此巻一巻の骨子は高氏が厭くなきの慾を責め亂階の基ひを明らかにするにあり、實に氷は霜を踏むより至るならひなれば、亂臣賊子といふものは其初めこゝろ言葉を愼しまざるより出で來るなり、世の中の衰ふると申は日月の光りのかけるにも非ず草木の色のあらたまるにもあらじ、人の心の惡しくなり行くを末世とはいへるにやあらん。高氏まことに其功あるべしと云へど、亂治まるのち連りに昇進して從三位となり、ほどなく亦た參議從二位まで登り、三ヶ國の吏務守護およびあまたの郡莊をたまわり、弟直義も左馬頭に任じ、身は恐れ多くも天皇の御諱を一字戴だき奉まつりて尊氏と稱せしかど、渥恩古へにもをさ〳〵例しなき程なり。天皇其功を思し召すは左もありなん、高氏たらんもの若し眞に國を愛せば、須からく恩を謝して賜ものを辭ひ申すか、若しくは位を受て郡莊を返し奉まつるべき也、然るにいよ〳〵天恩に狃れて慾心滿足する所ろなく、ます〳〵望みを大ひにして獨り榮利を擅ひまゝにせし

かば、他の幾多の功臣は報わるゝ所其割に少なく、况してや下々の武士に至りては、一生を九死の中に得て世治まり身を安んずるの賞典を一つだに受くる所ろなかりしかば、事を知らぬものゝ習ひとて不所存にも天朝を恨み奉まつり、遂に逆臣の誘ないに迷はされて弓を禁廷に彎くに至りぬ、彼等が愚甚はだ愍れむべくして之を誘なへるものゝ罪いよ／＼悪むべし、必竟其の起りは悉とく高氏が厭くなきの慾情に發すと云ふべし、左れば云く、

君は万性の主にてましませば限りある地を以て限りなき人に分たせ玉はんことは推して測り奉つるべし、若し一國づつを望まば六十六人にてふさがりなん、一郡づゝと云ふても日本は五百九十四郡にてあれ五百九十四人は喜こぶとも千万人の人は喜こばじ、况んや日本の半を志ざし皆ながら望まば、帝王はいづこ治らせ玉ふべきにか、かゝる心の兆して言葉にも出で而てにも愧る色のなきを謀叛の初と云ふべき也。頼朝の時文治の比にや奥の泰衡を追討しに身づからむかふことありしに、平の重忠が先陣にて其功すぐれたりければ五十四郡の中いづくを望むべかりけるに、長岡の郡とて極めたる少さき所を望みたまわりけるとぞ、人にひろく賞をも行なわしめんが爲にやかしこかりけるおのこにこそ。

因りて思ふに、今の政府に居玉ふ大臣貴顕の方々は、昔し幕府の權を擅ひまゝにして爲に王政の振はざるを慨き、勤王精忠の念やみがたくして君が爲に維新の戰ひをも爲されたるとあり、天命遂に善に與みし王道快復して今の明治の御世となりたるは、抑そも今上皇帝の御德厳そかなるに由るとは今更申すまでもなけれど、一つには維新舊勳の方々の忠誠浅からざるに由るとにて、即はち今の帝政は其人々の多年熱望して只管之を發揮せんと盡力せられたるものにてあるべし、而して其時勢現に來り北畠親房もし世に存らへたらましかば必らず涙を垂て感謝すべきの時勢とはなれり、彼に全く相似たる忠臣たる今の勳臣諸君は斯て幸にして亦た正統記を著すの必要もなし、左れど諸君をして若し言わしめば其議論は全く正統記の議論にして、我等は君の爲に忠を盡せしのみ功に至つては固より報わるべしとは願わず陛下もし臣を愛せば其咫尺に接せしめ玉ふにて足れり地領賞典の祿に至りては他の幾多の之を望むものに賜はるべしとこそ申さるゝなるべし。

左れど陛下は勳臣を重んじ玉ふが故に、諸君をして只だ元の

儘の書生にて置かせ玉ふと決してある可らず、此は諸君が如何に辭ろひ玉ふとも定めし御聞屆けあらせらるゝとなけん、之を以て諸君が爵を受け、位を受け、元の足輕平民にも似ず今は雲上宮中に列するの華族とあらるゝと必らずしも惡しきにあらず、諸君は忍びて永迄も之を戴かれて可なり、但だ黄金に至りては何人も懇望するものなれば、成るべくは之を辭退し奉まつるか、若し受け玉ふとも成るべくは之を少くして受け玉ふは當に然るべし、之れ啻に諸君が初めの志にてあるのみならず永く天下を安くするの處置あり。此頃黒田井上伊藤の三伯、大臣の榮職を退ぞき、后進の人を擧げられたり、尤も然るべきとにて諸君の誠忠いよ〳〵現はる、此上は諸君其官を辭すると共に成るべくは更に月給をも辭し、所云る人にひろく賞を行なはしめんとを希わるべし、諸君先づ如此くならば以下の人々も亦た之に慣ひ、滿朝靡然として其風に化し、出費一と方ならず減じ、他の后進の人を進むるに大ひある益あるのみならず、万民も荷擔少うありて太平を歌ふべし、斯くあらんには帝室いよ〳〵安く、內閣ますます固く、百姓の幸わひ極まりなからんとす。之れを王道隆盛の御代とは申す。

論説

○文學極衰の原因及び其矯正法

雁陵生

今日は果して文學極衰の時代あるや否や吾人は之を知らず然れども島田三郎先生は文學極衰の時代なりと言はれ福澤諭吉先生も今日の文學者は世間に賣れ口好き文躰の眞似をするものゝみにて一歩人に擢んでんとする精神減少し云々と歎息せられ森田思軒先生も德富蘇峯先生に與ふる書中に「文學に執心なる同好の士は實に日に月に其數を增すものゝ如くなり而して同時に又た輕薄の習を長ずる傾きはあらざる歟、怡々自ら喜ぶの風をなさんとするの懼れはあらざる歟名實之賓と云ふは磨すべからざるの至理なれども此ごろの如きは又何ぞ其れ名を馳するの甚だ容易なるや」云々と歎息せられたり然れども諸先生は文學界の現狀を歎息せらるゝのみにして未だ原因を探究して之を矯正するの策を奏ぜられず是れ吾人が大に憾む所なり。

吾人常に謂らく福澤先生が物質的文明を奬勵せられてより我國人は上下の區別なく皆拜金的となれり文學者も亦清貧を甘んぜざるに至れり德富先生が青年社會を皷舞せられてより青

年文學者は自負心を增長して自己の學識未だ充實せざるに早く既に老文學者を淩蔑するに至れり而して島田先生森田先生も亦文學者をして名利の念を勃興せしめたる罪あり嗚呼諸先生は文學者をして拜金的とならしめ馳名的とならしめたる罪あり豈に之を矯正するの義務なからんや。

吾人は福澤先生に望む先生は一方に於て商業家工業家等に拜金主義を吹き込まるゝと同時に他方に於ては文學者に安貧主義を吹き込まれよ坪内雄藏長谷川辰之助諸氏は岩崎彌太郎大倉喜八郎諸氏と同等の人物なることを論辯せられよ島田先生は政事家なり政事家を重ぜらるゝならん吾人は先生に望むグラッドストンを以てスペンサーに優るゝ人物と思はるゝ勿れチエールを以てユゴーに優るゝ人物と思はるゝ勿れ又吾人は德富先生森田先生に望む青年文學者を鼓舞せらるゝと同時に多く作らんと欲せば先づ多く讀むべし而して閎然たる大著作を爲すの力あらば爲すべし片々たる小著作は止むるに如かずと云ふの意を青年文學者に示されよ。

諸先生にして吾人の妄言を容れらるれば幾分か青年文學者の名擧心利益心を抑制することを得て文學界の治安を保つべし日本文學の隆盛を庶幾すべし。

批評

〇國民之友新年附錄　撫象子

森林太郎氏の「舞姬」に對しては、吾れ一讀の後ち躍り立つ迄に憤ふり、亦嘔吐するほどに胸わろくなれり、嗚呼此れ大學才子留學の末路か、彼能く書を讀めり、彼よく文を草せり、彼よく新聞紙に報道を爲せり、而して彼は正禮を履まず一舞姬に私通し、不生の兒を擧させてクロステル街陰四階の黑室裏に戀々踟蹰し、一と度び伯に招かるれば犬の如く仕へ、再び招れて輕宕兒となりて東に歸らんとす、其意思の弱きと女俳優よりも弱く其操なきは商人よりも甚はだし、斯て彼は數年の親しみを斷ち、但し正義の爲めに斷つに非ず黃金虛榮の爲めに斷ち、彼の憫れむべき佳人を狂ならしめて意氣地なくも歸國の船に上り、船中又たく思ひ出してくよくよと歎き其次第を筆記したりと、吾れ之を男子とは思はず況して大學の卒業生なりと思はんや、左れど悲しき哉著者よく寫せる所ろありと言ふことを要するは日本帝國大學の秀才に多少此類の男子ありと思ふが故也。

小說として評し、末段エリスが狂氣せるの條は秀でたりと認たむ。

…我名を呼びていたく罵り髮をむしり蒲團を嚙みおどし又遂かに心づきたる樣にて物を探り討めたり母の取りて與ふるをば悉く拋ちしが机の上ありし襁褓を與へたる時、探り見て顏に押し當て涙を流して泣きぬ………ダルドルフの癲狂院に入れんとせしに泣き呼びて聽かず後れ彼の襁褓一つを身につけて幾度か出して見ては歔欷す。

右狂とあるの一段は文必ずしも精細ならずして而もよく要緊を得、一々生理上の病狀に適ひて、讀去り宛然見るが如く情極まりて悲し、著者が醫學士たるを思ふときは蓋し其因なきに非ずハートヰッヒが「佳人歎」を著す者之が爲め特に生理學を學ぶと三年なりしと、凡そ養ふ所ろありて發するの文は自ら價ひあるものあり。

紅葉山人の「拈華微笑」は如何にも題名に適するの作なり、文章例の如く艶にしてシブし、趣向奇樣にして可愛らし、時々にフイ〳〵と起る暫時の人情を寫す至つて巧みなりと云ふべし、若し之にて人情を盡せりと云はゞ固より不同意なれど、其の或る人情を寫すとには一種特得の妙を得たりと云ふべし、但だ惜むらくは文章餘りに目立ち耳立ちて全躰の主旨を忘却するとなり、然れども一席の興話として之を聞くには近來亦た如此き好文字あらず。

○谷間の姫百合　金港堂版

末松謙澄君譯「谷間の姫百合」第三卷が出ました。文章は一層熟して老實なうちに雅致を增し、趣向はいよ〳〵佳境に入ります、之を冷やかに評すれば、貴族的の痴話物語に過ないのですが、其中に物すごい半獄の事、淸らかなる瑠璃の事を散見せしめてあるので漸やく心を慰さめます、原本の意味と感想とを失なわないやうにして扨て趣きを西洋らしい日本に作りかへ、左ればとて日本人らしくもなく西洋人くさくもなく、矢張り日本人が西洋の事でもボンヤリと話しをするかと思へるやうに書れた所ろが譯者の苦心の點でしやう。綠と瑠璃との性質の相違は可なり現われて居ますが、入江伯と亮三との氣質が少しも分らないのは殘念です。第二十九頁に瑠璃が父の問に答へて

私にはそんな内證などはありませぬ内證事とは全躰何のことですか私は夫さへも存じませぬ私しのしたことは開けてある書物と同じことです何處でも勝手にお讀み遊ばすことが出來ます。

第十頁に、母は有洲伯に言きかせて、

夫れては一の其方に云つて置かねばならぬことがある私は虎にもさう云つたのだが男の意氣地とか女の持前とか云ふものは早晩は挫けるものだよ大抵にして措くが宜いよ。

右の二節の如きは此の巻中尤とも價値ある句です、小説を好む方々は能々此邊にも氣を着けて御覽になると、隨分益があるでしやうと思ひ升。

雜錄

○ヒアワサの獵　しのぶ

年の初め、人々は甚たく騷ぐめり、余れ都を離れて或る片田舍に遊び、松林疎らに立ち、池の水冷やかに噴き出る處ろをそゞろありきす、鳥一つ二つ木梢にさへづる、吾れ近づき佇みて聞けば、「君よく〳〵我を追ひ玉ふな」と云ふ如き聲す、悲しみて去り池に臨めば鯉寒氣もなく躍り泳ぐ、吾れ餘念なく見てあれば浮み出て、口を開き君よと言はぬ斗りに笑ふ如く見へぬ、傍はらに小さき花咲けり、腰を屈めて熟視すれば、彼れ露を振り落し身を動かして揖禮す、「君よ妾はが姿を左な見玉ふな恥かしきとよ」と言へる聲微かに聞ゆ、時に誰が畜へる犬なるらん近づきて余に戯むれ尾を掉り逆さまに倒れて遊ぶ、偶たま持てる詩集を開きて讀めばヒアワサ山に狩りするの吟なり、嗚呼人間如何にして禽獸を殺すの權ある、況してや何の力を以て人を苦しめ人を害ふことを爲す、わが衷情は人をして不快ならしむるすら得堪へず、況んや之を害するをや、更に之を怒らするをや、嗚呼天地は琴の如く鳴り、草木は子供の如く無心に、鳥けものは僕の如くまめやかなり、ひとり天地間に立つ、さびしき所ろあらず、亦たくるしき心もなし、哀れを感じつゝも最と快ちよく潔ぎよし。

○一月小兒の養生　みよしのや主人

前にはなが〳〵しくも、一月の養生と題して、大人の心得ふ可き事共、かき綴りたるが、こゝにふたゝび、小兒の爲にしたき事こそあれ。一月には、世の親御達が欲がるまゝに、小兒等に物食すことあるは、わなみの年毎に、目擊するとなれども、こは決してよき事にはあらず。元來我國の兩親は、ちとどころにてはなく、大に小兒を驕す風ありとは、三島氏がは〇〇〇〇〇ゝのつとめとなん名付書にいたく、誡めたる辭なるが、此驕かしの風は、特に一月に於ていやまさりに、まさり居なり。外國にても、年の市の買物、クリスマスの贈物など、小兒を悦こばす爲めには、兩親始じめ親族のものも、餘計なる玩弄

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

物など與へ、小兒も亦た、平常よりは餘分のものをねだれども、多くは玩弄物の類にて、菓子の類は少く、菓子と云ふも、多分はビスケット、飴、煎餅などの類にて、消化を害ふ砂糖菓子、菓物などは與へぬを常とするぞかし。

然るに我國にては、年來の贈物とて、別て小兒の爲と云ふ物もなけれど、玩弄物の贈物の數少きは、皆人の知るところなり。赤兒より小兒に移り行く頃は、人々玩弄物を贈物となせども、御喰初の濟て間もなき邊より、小兒の贈物とし云へば、菓子なり、此をしもこゝに、こと右流左く云ふにはあらねど、我國にては、餘りに何かれのきらいなく、甘き菓子を小兒に與ふる風あり、一月の內には、此の風の制限を弛め、云ふがまに〳〵菓子類を小兒に與ふるは、實によろしからず、日本の菓子は砂糖分多く、滋養分少くして、健康なる大人にさえ、胃を害ひ消化を障ぐとは、余が友、助教授坪井次郎氏の調査にて、前號にも既に之を揭げたれば、讀みたらん人は知らる可し。

されば、一月と云ふも、人間一生中の大切なる月日、ことには一年の計をさえ定むる月なれば、此の時には、別て一生の計をも定む可き小兒等には、養生の事始をこそなさす可きならん。なにしかも胃腸を害ひ、消化を障ぐと知りつゝ、甘き菓子、菓物、餅の類を、欲しがる儘に與ふ可きや。また幼き小兒等は、特に容易に消食器の病を起すものなり、されば午後腹に充滿るほど食物を與ふれば、夜に到りて寢りに就かず、共に身躰の發育を障ぐる知る可し。

小兒は晝のうちは、ことに外方に出して遊ばすを宜とす、一月には、それに最も妙なる玩弄物あり、そはなになるや、紙鳶なり、紙鳶を飛ばす事のよき事なるは、はゝのつとめ子の巻（五十丁）にもしるしあれば、今之を拔書して示さんに

　日本では男兒が紙鳶を飛します。紙鳶は家の中では飛らないものですから、是非共外へ出る。外へ出ても風がなければいけますまい。其所で風に當る。靜として居ては飛らないから走る。下を向いて居れば、紙鳶が見ないから、首を上げ胸を開て上を仰向、其爲に肺は充分の伸縮をするなど、實に玩弄物でも、此などは極好物でせう。

此につきて氏は女兒には羽子ぞよきとて

　復女子の羽子も同事、家の中ではいけませぬ。矢張外へ出る、此は風が吹てはいけませぬけれども、矢張仰向て五體を運動しますから、實に紙鳶と對して、眞配偶と云ても宜。

實一月と云ふ月には、小兒等が餘計の食物を食べる事多け

れど、まだ〳〵かゝる遊戲のありてぞ、健康を保つ可けれ、されバ、程よく物食せ置きたらましかば、此遊戲どもの、いかばかりか、効驗多からん。

就て茲に一言の言ふ可き事こそあれ、去る頃より、東京の市などハ、警察の手當行き屆き、不埒の輩ハ、首縮めて出もやらず、宵越の錢有んハ、恥辱なりなど考へし輩も、貯金の通帳ほしき樣になり行んとするハ、嬉しき事ながら、街上の締り餘りに嚴しく行屆きて、小兒等が、紙鳶飛げ、羽子つく事さへ、警察官の、いかめしふ小言聞かすものから、先の遊戲どもせんにも、其場所なきをいかにせん。故に遊ぶ可き小兒等も、家の中にのみ籠り居て、常も菓子ねだりのみするに到るなり。

因りて望ましきハ、早く市中所々に公園の設あらん事なり、此をさへ所々に設けたらんには、小兒等の遊戲場出來て、隨意に走り行き、紙鳶飛げ、羽子つき、又ハ鞠子投げ等、自由とあるべし、それまでハ、先の遊戲どもも、市中にてハ所謂云ふ可くして行ひ難き事の一にぞあるらん、管に市中の小兒等の爲には、遊戲場のあきぞ、小兒衞生上の越度あれ。

室內の遊戲、いな運動に就きてハ吾儕別に說あれども、こは後日充分研究せし上、公にすべし、こゝにはたゞ、主に目前の小兒の養生をのみ、撮みてかき記すになん。

○父と夫と何れか尊とき　　みどり

古しへ鄭の國祭仲の女雍姬、其母に夫と父といづれか尊ときと問へりしに、母答ふらく、人盡夫也父一而已胡可比也と云けり、蓋は世の中の男子は皆な擇びて夫とする事を得べし、父に至りては只だ一人にて比らぶべきにあらずと云ふなり、之れ大ひに誤まれり、實に父も一人にてあれど夫とすべきものも世に一人の外あるべからず、凡そ愛は博ろきものと云へど、男女相思ふの愛に至りては極めて狹きものあり、世を擧りて潮の如く男子あらんとも己が夫とすべきは此人の外にあらずと信じ、身も魂しいも悉とく之に捧げ得てこそ扨て其人の妻ともなるなれ、苟くも然らずたゞ人の命の儘に之に嫁ぎ貰わるゝが爲めに妻とあると云はゞ此れ娼妓なり妻にはあらず、人生れ出でゝ男女と分れ、男女のち合して一躰となる、夫婦は決してかりそめの交わりにあらず、最と清く最と尊とむべきものなりと知らば、人盡夫也など申すは上もなき不德とは知らるゝあり、今の女子たらん者の夢にも左あ思ひ誤まり玉ふとあるべからず。

○頭痛に色々あり　　社の小僧

世の中に頭のない人が生れぬ以上は世の中に頭痛を疾まぬ人はありません、もとより神經のみの作用で頭痛を惱む人もありますが大抵は膽汁の作用によりて疾みを起す人が多いようです膽汁と申すものは以前は健康なる人の血液中に含まる丶ものでこの汁が血液中より絞り出だされて炭素及び石鹸質の汁となりこれが十二指腸の方へ注ぎ込まれて消化の力を輔けます、しかしこれが左樣に都合よく參ればよしさもなくて膽汁が血液の中にいつ迄も含まれて居ると血液は重くなり從て消化の力も薄弱になります、この重い血が身躰の諸部を循環して頭へ環り來ると腦の尤も精細なる神經に刺戟を與へて即ち頭痛と申すものが起るノデス、それまこの痛みは胃の下部み於て膽汁の十分なることによります〳〵強くなることがあります、胃も十分に膽汁を持て居りますから少しも入用がなく腸も不斷にかはりませんから血液から膽汁を受取るにも及びませんそれ故人間になくてならぬ血液の過分は此時に大なる惱みを人に與へるようになります。また此に一つ別に膽汁より起る頭痛がありますこれは前のものと違て時を定めて起るのです人が今迄身躰を安めて居るに急に何か激しき働をするような時には血液の中にある膽汁が胃の中へ絞り取られて多量の汁液が溜ります、すると膽汁の多いために消化を弱められてしまいますすると食事を取る時にも味がなく膽汁は食物を消化するにはあまり量が多すぎる已ならず血液中の膽汁をまた要さぬようになり食事をする每に頭痛を起しいつも働けばすぐ腦に刺戟を與へるようになります、こう云ふような人は顏色が惡しく常に唾液が多いようになります、可成は新鮮の空氣中に運動をなして血液を新らしくするようにし寢所などは高いものを用い食物の分量を定めることが必要です頭痛ほど癖になるものはありません、ことに女流の方々には多いようですから膽汁より起る頭痛の有樣を單簡に誌しました。

○孫供よくお聞よ　　山下石濟

夫はお前方が言ふ通りで、若い時は誰でも左樣思ふのです、兎角老人の言ふとと聞くと何でも古くさいやうで、又た頑固の事を云ふのかと聞かぬ前から既に輕蔑して掛るのだから、迚も信じられるものではない、ダガ然しお前方もモゥ七八年立つて見ると今日わしが言ふとが能く分つて來るです、人間は先づ家を持つと一段考が變るナ、夫から子供でも出來ると

又一段變る、更に孫が出來ると又一段の變がある、夫は／＼キツイ變化で、迚も今ま言ふても御前方には分るとはない先づ其時に爲つて考へて見ると宜しひ、然し此丈の事は言ふて置くよ、人間は何でも目の着く所ろ丈しか分らないので、そして其の目の着く所ろが全世界だと思ふものだよ、小説でも書いて居るものは世の中は皆な此樣なものと考へるだらう、學問斗りして居るものは世間は　樣なものと考へるだらう、商人は商人らしう、坊守は坊守らしく、華族は華族らしく、貧乏人は貧乏人らしく考へるので、其の人々が「此樣んなもの」と云ふ其の此樣んなものが皆な銘々が一方丈を見て此樣なものなので、其外に世間は茫々として廣く、理窟も人情もまだ／＼夫丈には限らないものだよ、ダカラ餘り偏窟になつて一方斗り見て居ると飛んだ間違をするものです、先づ十間の丘に上て見るよりは百間の山に上つて見ると遠く迄でが見へるだらう、年を取ると云ものは丁度こんなもので、言はゞ丈が伸るにつれて世の中が廣く見へるやうなものです、夫ゆへ老人先輩の言ふとはパッとして不熱心のやうにも聞えるので青年などは大層腹を立るとがあるが、段々經驗を積み世の中のとが分て來ると、昔しのやうな慷慨は餘り小供らしくなつて來て出來ぬやうになるものだよ、此理窟を能く考へて、餘り年上の人の言ふとを輕んじないやうになさい、男でも女でも皆な同じとだよ、老人だつて何もそんなに頑固斗りなものではありやしない、學問は進むかは知らんが人情と云ふものは昔しも今も大抵は同じものだ、老人は人情の先生だよ、エライものだよ。

○孰れか幸、孰れか不幸　　賤の男

一人あり天性穎敏、勞せずして能く記し勞せずして能く讀み勞せずして千言萬語の演説文章を爲す其議論は必ずしも苦心考慮するにあらず其擧動は必ずしも工夫修錬するに非ず其容儀自ら秀美に其生活甚だ容易なり故に其妻を迎へんとするにも甲女に縁談を申し込んで成らざれば乙女に申し込む乙女との約束破談となれば又丙女と約束す何事も瀟洒淡泊輕妙の趣ありて剛毅堅忍質實の風なきなり。

又た一人あり一事を爲し一書を讀み一文を草するに非常の苦心を要し其一議論一擧動悉く沈思熟考より成り生計困難にして轉世路の艱險を歎じ容儀疎野にして容易に配偶を得ること能ず故に自ら剛毅堅忍質實の氣風を養ふに適す然り善く耐へ善く忍び人生の眞味を咀嚼し得ば其に大幸なり通常人は

善く耐へ善く忍ぶこと能はざるを奈何せん嗚呼是れ孰れか幸孰れか不幸。

○愛情論（其一）

しきたへ

愛！單純なる愛、眞正の愛、そも愛てふ語は如何なる文字を以て書き著す可きか、青年壯士が夢のうち、幼き者が笑る面、美しきために戟を取る勇者の心にもあるぞかし、書き連ねたる歌のなか、高き淸操を養ふ預言者の上にも顯るれ、愛てふ文字は如何なる者を以て譬へ得べきか、世にたぐふ可きものありや、世の文學と歷史とを考え見よ、世上の秘密を明むる博物學者に尋ね見よ、解し難き宗教の起因と其理を解明す神秘學者に尋ね見よ、さなくば私が心に於て思を靜め考へよ浮世は悲歎の巷とは思はれじ、新婚の賀狀を受くる心地ぞすべし。

英國の詩人は云へり、

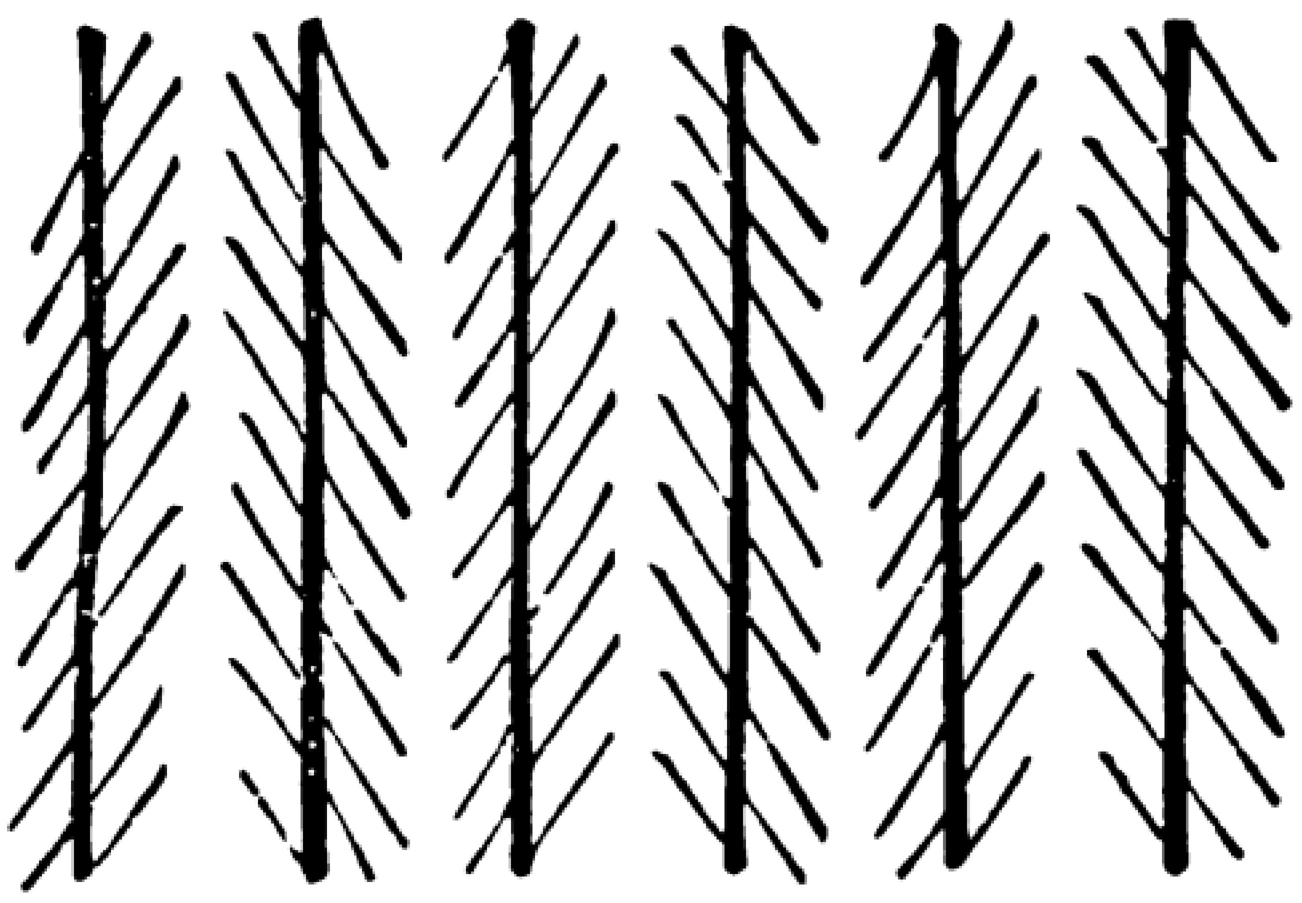
All thoughts, all passions, all delights,
Whatever stires this mortal frame
All are but minister ter of Love
All feed his sacred flame.

世の中に愛なき人の生活は、世の滿足を得る事かたく、全きを望て缺多く、豊かならずして常に憐ぞかし、愛てふものをもたざれば壯大美麗の生活も、憐れ、雲間の電光にひとしく消えてその跡なかるべし、マダム、デ、スチールは云へり、愛は男子に迄は詩註の如く、女子に迄は生ける完全せる歷史の如しと、これ蓋し男子には時々の愉快にして女子の生涯はこれに依れりとの意味あるべし、噫名譽も、富も、力も、何か、愛を、この純潔なる愛を持たざるの人よ、この神聖なる愛を輕ずるの人よ、この優美なる愛を弄ぶの人よ、御身如何に心より其淸操を高めてうるわしの賜を味はひ誠よりこの愛を愛し給はぬぞ。

愛は表てを飾る器に非ず、冷淡無情の方々が知り味ふ可きものにも非ず、しかしながらまた熱心なる學術家の机上に躍りまた精細なる歷史家の口頭に顯れ出るものぞかし嗚呼愛はいかに樂しきものぞたのしきものなるが故に此にまたかなしみを增すの器となれり愛よ愛は永遠に繼續せり汝は愛らしき處女が友たり然れどもまた勇敢なる猛卒が慰めなり神聖なる愛よ余は汝を永遠に讃美するの人たり汝よろしく世の匹夫が辱めをうくる勿れ立てよ愛、淸くあれよ愛、神聖の感化力に富めよ愛、噫愛は我が友たり愛は我が力たり。

○不思議なる畫

下にある畫は實に不思議です、之を眞直に見れば曲つて居て、曲げて見れば眞直に見へます、一休に聞ても無論分りません、何如なる學者に聞ても分らん、たゞ不思議だと云ふ斗りです、世の中に分らぬものは無い！、かやうに云ふは大ひある恐で、現に此の一の畫でも分らん。



○七福神圖記原漢文、抄錄　菊池三溪

福神を寫す者七、白鹿を寫す者一、翔鶴游龜を寫す者各二、金銀珠玉錦綉彩段を寫す者幾千百あるを知らず、鷁首涙に艤し、錦帆風を追ふ、上に回文歌一首を題す、船の中央に三稜矛を手にし、甲を被て立つ者は、毘沙門天に非ずや、毘沙門天の左に在て、粉面皓齒、琵琶を抱て端坐する者は、問はずして辨財天たるを知る、辨財天と臂を相交へ、軀幹短小、豐而大耳、烏巾を戴き、寶槌を執り、布囊を負ひ、米苞に跨る者は、則大黒天たり、大黒天の右側に踞し、靑袍烏帽、潑剌の棘鬣を挾み、篷々の竹竿を執る者は、惠比壽三郎其人あり、厖眉にして俯顱ある者は福祿壽たり、肥大にして腹便たる者は、布袋和尚たり、童顔にして鶴髮なる者は、壽老人たり、和漢に論なく、老少を分たず、悉く一船一席に萃る、多福を聚め祥瑞を具ふる圖と謂ふべきなり、抑斯圖は何人の創造する所なるを知らず、又何の時に剏るを知らず、毎歲一月、都人鋟版印刷してこれを鬻ぐ、幾千万紙啻のみあらず、第二日の夜、比屋購求してこれを枕に藉き、以て吉夢を獲るを祝す、名けて初夢と曰ふ、盖我江門の風俗古より然り、予も亦俗を免るゝ能はず、曾て其圖を枕にして寢ぬ、果して七福神を夢む、乃膜拜して禱て曰く、兒を生まば則毘沙門天の若く、勇にして且武からんを欲す、妻を娶らば則辨財天の若く、美にして艶ならんを欲す、錢多きことは、則大黒天布袋和尚の若く、大利を獲んことは、則惠比壽三郎の若く、眉壽萬年なるは則壽老人福祿壽の若くならんことを、伏して願ふ、福神眷顧して斯七福を頒て以てこれを已に錫へ、言未だ訖らざるに、福神大に笑ふ、相誠て曰く、咄、鄙夫、何ぞ其れ貪婪厭くとなき一に此に至るや、吾儕神仙すら斯の一福を獲て、尙は以て餘りありとす、而るを况んや七福をや、吾以てこれを懲さ

ざるべからずと、是に於て毘沙門天矛を揮て、吾胸を縦き、大黒天槌を揮て、吾頭を打ち、辨財天絃索を解て、吾手足を縛し、恵比壽三郎は竹竿を執て、吾背を鞭笞す、布袋和尚盛る布嚢を以てし、壽老人福祿壽と相倶に舁て之を海に擠す、予叫號して哀を乞ふ、聲其耳に徹す、驚き覺めば、則冷汗背に浹く、始て其夢たることを知る、因て書して以て世の蜀を望で饜くことなき人に諗ぐ。

○玉の輿　　賤の女

氏なくして玉の輿に乘ると云ふほど、女につらい諺はありません、人は之を榮華のやうに誇りましやうが、私しには心を割く劍の如くに感ぜられます、身に夫丈の才もなく、況して一廉の德と云ふものもなく、只だ顏が美しひと云つて顏を愛でられて玉の輿に乘ればとて何の立身でしやう、夫よりも良人は身健やかにして獵に出で、妻は洗ひすゝぎて爐にもやし、夜るうちくつろぎて物語ると申す、終生の友に超す何の幸わいがありましやうか、ある人の詩に

江頭女兒雙髻丫、常隨阿母供桑麻、當戸夜織聲咿啞、
地爐豆萁煎土茶、長成嫁與東西家、柴門相對不上東、
青裙竹笥何所嗟、插髻燁々牽牛花、城中妖妹臉如霞、
爭嫁官人慕高華、青驪一出天之涯、年々傷春抱琵琶。

とあります、をぼろに悟りました此の意味が、私の心に一パイに滿ちて、たわれたる殿方に好かれたくもありません。

小說

○イナック、アーデン物語　　テニソン著　菜女譯

英國の海岸に絕壁の何處からともなく立列つて來て途切れた間隙にひとつの漁村をなしたる處があります、黃ろい沙の濱邊から向ふを眺めると狹い波止塲の廻はりに赤瓦の家根がひとかたまりと苔の蒸した古寺が見え升、これから一本町をだらに登つた處に磨機の水車が高く空にそびへてゐ升、此後に昔しデインス人が砦を築た跡が殘つてゐる高臺がある、其高臺がすり鉢形に凹んだ中に蒼々とした榛樹の林が繁茂てゐて秋の木の實の熟する時分山遊の人がいつもこゝへ集り升。百年の昔しこの濱に帆網の切、古網、銹さびた錨、泊船、何くれとなく打捨あるなかに三人の子供が遊んでゐました、小娘の名はアンイ、リイとて村で評判の器量よし、フイリツプとれうきやの一人息子、外にイナツクと云ふはいつぞや冬の難船に孤になつたとかの朴訥ら敷水夫の子でした、この三人

ハ常も沙を握つてハ城を築き寄來る波にたわいなく打壞されるのを眺めたり、行く白波を追ひ詰めてハまた追返される其少さな足跡を毎日濱邊え着たり消されたりしてゐました。
絶壁の下へ打込む怒濤のあけた狹い洞穴へ這つてハ此三人がまゝ事をよくしましたがイナックが一日御亭主にあれバ翌日ハフィリップが御亭主にありました、若し細君になるハいつもエニイでした、時としてハイナックが一週間も續けて御亭主にあつてゐて「是ハ僕のうちでエニイハ僕の妻だ」と威張るとフィリップが「僕のにもしあくつちやいやだ代り／＼にしよう」と云ました、喧嘩すれバ何しても骨節の逞敷イナックの方が勝でした、するとフィリップが怒の涙を眼に一杯溜めて「君憎い事をするなあ」と大聲擧て叫びました、こんな時にハエニイが貰い泣をしあがら「あたしの事で喧嘩しちや困り升よ、そんならふたりのおかみさんになりませう」と云つて宥めました。
さて樂しかつた子供の折も春の曙のほの／＼と過行き、登る旭の壯年ハ心情のさらに溫まると共に二人ともひとへにエニイ女に思をよせました、イナックハ明らさまに己が心を通じましたがフィリップハ默して深く情を潛めました、乙女ハ却てフィリップに深切に見えながらもイナックに戀して居ましたが、これハ我知らずの戀で人にそうかと尋ねられでもしたら否んだ位でしたろう、イナックハ飽まで節儉をして自分の漁船を買取つてエニイを娶る準備をしようと常に固く決心してゐましたが萬事都合よく行ましていつしか、イナックほど運強くつて大膽で危難に懸て用心深い漁師ハ濱續きの漁村にとてもないといふ位になりました、それ計りであく一年間ある商船に乘組で水夫の業に充分熟達し、すさま敷怒濤の腮から人の命を救つた事さへ三度もありましたからみんなに好く思はれてゐました、かくて二十一才になるかならぬに自分の船を買て水車へと坂になつてる細い町の中途へエニイと一處に世帶を持つ積りで小きれいで可愛ら敷家を定めました。
時ハ秋の夕まぐれ今日ころハと云て若手の誰れ彼が小籠大袋を手ん手にひつさげて榛拾ひの大遊山に行ましたがフィリップハ折ふし病氣であつた父の看病で一時間も人に後れて行ました、小山に登つて林へ這り凹い方へダラ／＼と下る處でフト見たふたりハイナックとエニイで手を採り合て腰かけてゐましたがイナックの大きやかな眼と日に燒た顏にいとも清淨な熱愛の光が輝いてゐました、フィリップは一眼見てはや己が情運の盡を認めました、それから倚も親み合ふ樣子に顏をそ

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

向けて脇道へ曲りあとれ笑ひゝそめく中に自分ひとりは木がくれて人知れず限りもなき痛苦を味ひ、起て家に戻りながらも心斗りはあこがれて得も云れぬ恨を擔ひました。

そこで此二人はめで度婚姻をして七年といふめで度年月を過しましたが共に働く健康はあり、互に相愛して居りましたから實に幸福な年月でした、其後に子供も出來ましたが始めは女の子でした、イナックは總領の赤子の泣聲の耳に這ると共にどうぞ及ばん限り節倹し双親に勝る教育がして遣り度といふ立派な望を起しました、二年過てまた男子をまふけました時には此希望がます／＼堅固になりましたが妻にとつてはイナックが荒い沖に出て居たり近林を廻つてあるく間淋敷さを慰むる者は子供斗りでした、そしてイナックの遣ふ白馬や磯くさい籠の中や自分の濱風にさらした顔はたゞ市場斗りでなく丁度彼の高臺の後ろになつてる門がまへのお屋敷にさへ知られる様になりました。

然るに人事は總て變化を免かれぬ處から此幸福な境界も聊か變つて來ました、此少さな港から三四里離れた處にモット大きな港が新たに開けましてイナックは時々陸を通つたりまたは船に乗たりしてそこへ行きましたが、ある時此港に錨を下ろして居た間帆柱を登ろうとして過つて足をすべらせ落ましたが人々が集つて抱き起して見舛と足の骨が一本折れていました、其まゝそこで療治をしていますと家では妻が產をして二男を擧ましたがこれはよは／＼敷子でしたそれのみか商買がたきさへ出來て來まして物事が自然不如意になりました。

寄書

○兒ヨハンに與ふる書　マッティアスクラウディウス　柳村生譯

親愛なるヨハンよ余は金銀財寶を有せず然れ共余の有する物は之を汝に與ふべし

余の歸らぬ旅路に出立すべきの時は漸く近より來れり余は汝を伴ふ能はずして普其なる助言少なき此世に見遺すなり。

人生れながらにして賢なる者あらず時と經歷とは吾人を教へて其禾協を淨めしむ

余は汝よりも久しく此世を見たり。

故に余は汝に一二の助言を與へ余の發見したるとき時の余に教へたるとさを告げんと欲す。

善ならざる者は大なるなく存在せざる者は眞なるなし。

人は兹に家を出で自から好んで粗惡なる外套を纏ひ四方を周游すさらば見るべし彼を圍繞せる他の物體は皆自から知るなくして存在し運動す人は一個の靈性あり而かも日影の其上を過ぐる墻壁の如く彼を圍繞せる凡ての物體は一に他物の意志と努力とに任ず人は自信を以て其運命を掌握す。

而して右に往くべきや將た左に往くべきやの問題の彼に於ける同一なる價値を有するに非ず。

汝は彼の自から能く商量し得て其行路を認むるとを信するなかれ。

現世の彼に於ける再び來らす而して見得べからざる者は彼は見す現世は知らす。

さらば汝は無用の勞力を倹せよ而して己れに一の悲歎もなすなかれ而して自から思慮せよ。

惡を爲す汝は能く自から制せよ。

汝の心を目前の事物に懸けるなかれ。

愛兒よ眞理は吾人に來らす却て吾人より彼に往かざるべからす。

汝の見得べき者は見よ而して汝の眼光を放て見得べからざる者と永遠なる者とに於ては一に神の聖言を守れ。

汝の祖先の宗教を信奉せよ而して神學上の空論家を憎め。

汝自身よりは何者も恐るゝなかれ吾人の内部には欺かざるの法官ありて其發言の吾人に於ける全世界の喝采よりも希臘人埃及人の知識よりも重しとなす兒よ彼の發言に逆ふなく行へ而して汝の思慮し企圖するとは先づ手を汝の額に加へ彼に助言を請へ彼は始めは唯低く語り無邪なる小兒の吃々たるが如し然れども汝若し彼の無邪を敬せば彼は漸次に其舌頭を鍛し明確に語らん。

好んで他人に學べ而して知識幸福光明自由德雅等の語の響く處には勉めて汝の耳を傾けよ然れども輕しく信ずるなかれ濫く信ずるなかれ何となれば靈は凡ての水を保有せず而して其之を保有するや亦種々の方法あり彼等は其之を話し得之を話するや一の事實を有すと思惟す然れども兒よ然らば人は之を話し得之を話するが故に事實を有せず言語は言語に過ぎざるのみ而して彼等の若く全然輕快流暢なる處には汝の注意を加へよ何となれば積術を負ふの馬は徐々に歩むなり。

何物も驅逐及び驅逐者に望むなかれ而して喧噪の街衢に聞えるあらば其處を去れ。

或人汝に知識を教へんと欲するあらば直に之を見よ彼は自負自尊己れを學識に富める者となすも之を容せ唯敬して之を避けよ一人も其有せざる物は又之を與ふるを得ざるべし而して己れの欲するとを爲し得んと欲する者は自由ならずして却て己れの爲すべきとを欲し得る者は自由なり己れを賢なりとなす者は賢ならずして却て己れの不識を知り而して事物に依り其不明を療したる者は賢なり。

頭腦に在る物は頭腦に在り而して存在は凡ての性質中の第一なり。

知識の爲めに爲すべきとあらば知識を求めよ己れの利益を求むるなかれ己れの欲望を抑へ耐忍を以て其結果を待て。

多く神聖なる事物に就き思慮せよ而して其汝に於ける利益なくして去らざるとと醉世の全混紛をして醜敗せしむるとを確信せよ。

如何なる宗教をも慢るなかれば何となれば彼は精神上に屬するを以てなり而して汝は奇怪なる外形の後に何物の埋沒せるやを知らざるなり。

兒よ侮慢するは易し然れども理解するの勝れるに如かず。

汝自身の學びたるまでは他人を教ふるなかれ。

汝にして能ふべくんば眞理を忽かせにするなかれ而して己れをして好んで眞理の爲めに惱ましめよ然れども汝自身の事は眞理の事に非るを知れ而して彼等の兩立せんとを勉めよ然らざれば汝は汝の貴興を失はん。

善を爲せ而して其結果として何物の生ずるかを病ふるなかれ唯一を欲せよ而して之を其眞心より欲せよ。

汝の肉體を撫養せよ然れども彼は汝の靈魂には非ず。

有司に從順なれ而して他人をして彼に就き爭鬪せしむるなかれ。

各人に對するに正直を以てすべし然れども自から信ずるを難んぜよ。

他人の事に關するなかれ然れども己れの事は黽勉を以て之を爲すべし。

何人にも諂ふなかれ又何人をもして己れに諂はしむるなかれ。

他人をば各其身分に應じて尊敬せよ彼其身分を利用せざれば彼をして自から愧ぢしめよ。

何人よりも義務を負ふなかれ然れども自から先んじて凡ての人を己れの權利者の如くなせ。

常に剛膽なるを欲するなかれ然れども常に正義なれ。

何人をもして白髮ならしむるなかれ然れども汝にして直からば髮の黑白は關する所に非ず。

虛飾を爲すなかれ而して宜しく正しく衣よ。

汝にして有するならば好んで救ひ好んで與へよ然れども之が爲め多からんを考ふるなかれ汝にして有せざるならば一掬の冷水にて足れり然れども之が爲め少なからんを考ふるなかれ。

汝の知るとは盡く之を言ふなかれ然れども汝の言ふとは常に之を知れ。

己れを空大の事物に懸くるなかれ。

嘲弄者の側に坐するなかれ何となれば彼等は萬物の最も醜なる者なり。

僞善者を敬するなかれ然れども篤信者を敬し而して彼等に隨へ中心眞に神を畏るゝ者は大陽の如し假令ひ彼等は口を開かざるも萬物を照らし萬物を温む。

賞すべき價値ある事を爲せ然れども之を欲するなかれ。

若し困厄あらば之を己れに訴へよ他人に訴ふるなかれ。

常に或善事を心中に抱け。

余死せば手を以て余の眼を閉させ而して涕泣するなかれ。

汝の母に事へ而して死に至るまで彼女を敬せよ而して彼女を余の墓側に葬れ。

日々汝の發見すべき生死に就き熟考せよ而して其の勇氣を有せよ而して其怪に對せる愛と畏敬とを或方法に依り證明するなくして此世を去るなかれ。

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

○廢娼の事に就きて　四海漁夫

私は明治十八年の春に筑紫の片田舍より當地に罷出たるものです生來の不敏固より當地各社會の内情を知ることは出來ません然し純然たる書生の狀態を以て四年の日月を暮したることなれば此社會のことは畧ぼ得心致したる所存です就きましては今日貴社の御盡力の事に向て如何にも身の不敏を顧みず一言御願申さゞるを得ません。

偖て貴社御盡力のことゝは何でしやう外ではありません廢娼の一件です同事件に付ては貴社十分の赤誠を以て御辨論被成候は一度ならず女學雜誌の上にても其他の新聞雜誌にても拜承致しました然し世の中の事は已れの思ひ通りに爲らぬ克ちのものとは千歳の前に羊叔子とか言ふ人が申されし通り今日にても貴社の說に反對を試るものゝ勢力も中々薄弱のものではありませんイヽエ能く／＼思へば廢娼說の爲隨分心細き感じが致しまする是が私が此書を作りたる所以です。

私は今も書生の身であれば堂々たる政治的とか經濟的とかの觀察を致すとは出來ませんから這樣のことは其人々に讓りまして私は書生社會の爲是非廢娼の實跡を擧げてもらひ度ひのです私の只今就學して居りまする學校は(名は申しませんが)生徒も隨分多く學校の位置も決して下等のものではありせん從て同生徒中にも有爲の人物中々少くはありません此等の學生が該校に入りたる始めには尙ほ年も幼く其志の向ふ所も只學事のみでした然るに已に二三年を經たる今日となりましては已れの年も長じ交る人も多くなると共に色々思もよらぬ言行を顯すものがありまする殊に才氣秀逸精神活潑天晴大成器を具へたるものが假に女らしく老人らしくなるのが續々私共の見聞に觸れる樣になりましたスルト又一方では二三年の前には正眞謹愼人情小說さへ手にせざるものゝ平氣に淺草より鐵道馬車に乘て來た理由を誇り說くものが出て來ました私は心理學も人情哲學も知りませんから斯樣に暫時の間に人の性情の變更するのを見て唯た怪しみ訝るのみですイヽエ唯だ此等友人の爲他日の事を思ふて悲しみます。

今日の書生といふものは私が申すまでもなく他日の日本を委托せらるゝもので決して輕々しき身分ではありません然るに此の重要の位置を控へ居る書生殊に間には他日中等以上の社會を組織すべき責任を有し居る身分の者が厚顏を以て手柄となし破廉耻を以て磊落となすの風騷々として勢を逞くするの情態あるは如何にも歎かはしきの至りです厚顏となり破廉耻となるに最良の學校は何處でしやふ嗚呼思へば東京は何故四里四方といふ程に廣く其規模を定めましたるふ中央の一二里四方位にして其他の人家を取拂はしたら善ひのにといふ愚痴も出ます。

凡そ書生といふものは細やかな俗事に立入るを嫌ふものですサレバ華々しく飾り立てゝ其の心を迷はす如き場所を除ちますれば決して故らに心を苦しめ思を勞して已れを不德の俗界に落す樣のことは致しませぬ又書生といふものは通例狂者狷者の風を帶ひたるものです法を破り禁を犯して已れ他日の企望を妨ぐる如きことは致しませぬ如何に道德腐敗の今日でも書生社會には實に他日の企望といふ一種の勢力ありて道德を冥々の間に維持して居りまする然るに今日の如く此上なき不道德の事を行ふても他日の企望を妨げられるの恐なきことゝすれば血氣壯んなる身の仕出す事はどふでしやふ之を思ひますれば私は心理學も人情哲學も知りませぬけれども尙ほ能く有爲の書生が瞬息の間に其情性を變じ其身分を失ふ理由を了解致します。

されば國法を以て明かに斯の不道德の所行を禁制致しますれば書生社會は立派に惡風を一洗することが出來るに相違ありません然るに廢娼に反對の論者は斯くすれば無知の多人數獸慾に左右せらるゝものが更に大なる損害を蒙るに至らんと申ます併し國の爲又天下の爲を考へますれば此等無知の人民に許していゝエ寧ろ奬勵して不道德の事をなして僅に其或る部分の損害を免れしむると他日の日本を引受くべき青年書生を窮境より拯ひ出すとは孰れか利孰れか害少しく道理を解せるものには直に之を判するとが出來ましやふ世の中の改良進歩を謀るには少し許りは犧牲に供するの覺悟なかるべからずとは誰しもいふ言です故に私は書生社會の爲を思ふのみにても十分廢娼の議を決するの價あるものと考へます況んや其他に於ても利害相較ぶれば廢娼の利遙に其害に優るものあること眼前に昭々たるをやです願くは岩本先生御始め貴社滿腔の赤誠を以て此議を透徹せしめ書生社會に限らず凡ての暗黑社會に彷徨せる人々の爲に指南車とならればよ假令如何に朝に反對の處置を取らるゝも野に反對の論者あるも。

私は基督教信者ではありません就きましては右陳せしことの内には或は同教義に背けることあるやも知れません併し一片國を思ひ友を思ふの眞情より發せし此言辭は俯仰天地に愧る所ありませんサレバ貴社にても其取るべきを取り其足らざるを教へ給へば幸甚し。

學校の事を陳せしもの所々に有之候故匿名にて差上ますする言辭の責任を免れんとの卑劣なる心情より斯く爲せりと思ひ給ふな。

閑書

○文章家の有無　山内暖雪

拜呈陳者貴社雜誌昨年十二月廿五日發兌第百九十三號新誌欄内を拜見致し候に文學と開化の關係てう見出しの下に吾人は元來世に文章家と云ふものゝあるべきを信ぜざるなり云々凡そ世に實利大益を爲すものゝ言行は自然の文章となると信ずるものなり云々との御言葉有之候が生の淺學なる是を拜讀して何となく疑の雲もやつき候まゝ御多忙をも顧みず御教授を奉乞上候抑も記者の御心にては眞個に實利大益を爲すものゝ言行は別に文章としてこれに意を用ゐざるも記者の所謂自然と立派なる文章となるものなりとの御考に候也成程小生も其の人の思想其の人の意志感情等よりして立派なるものなりせばこれを其のまゝに筆にするもまた立派なるものと確信罷在候得共丸て少しも養はざれば立派なる境界に進歩し難きものかと感ぜられ候若し記者の御言葉の如く世に實利大益を爲すものゝ言行は自然と文章となるものなり云々と稱して特更に文章などには意を用ゐずとも宜しと申し候はゞ如何なものに候べきや文章にして果して實利大益を爲すものゝ言行は自然と文章となるものなるか故に特に是れに用意せずとも可なりと申さば論理學や數理學の如きも思想整理して思考力の整しきものは論式や數理式を學ばずとも自然と論理數理が其の腦中に形造らるゝが故にこれを學ばずとも宜しと申すを得べく候にや心に例令完全善美なる自然の文章なるもの有之候てもこれを筆にあらはして人を感動し世を益し人を利せんとするも筆心のまゝならざれば果して如何なるものに候にや如何に立派な思想を有しても口能く物云ふとかなはず候はゞ果して能く世を益し人を利するを得べきものに候にや好し筆に記し口に云ふを得るとするも其筆其口人を動かす程の力なく候はゞなきに滿足致すべきにや落語家の談話を聞くさへ上手とへたとによりて同じ事を談ずるにも一方は人を感動し一方は一向に感ぜしめぬには候はずや如此きものにさへ習練を要するを知らず思想等を發露する文章は倘ほ更らのことと存ぜられ候は如何にや此く申せばとて生と雖も決して徒に麗流の語をならべて夫れにて自得する人を崇拜するには無之候得共記者の言の如きは淺學なる生等に取りては如何にも解しがたく候まゝ御教授を仰ぎたてまつり候記者幸に御明教を垂れ玉はゞ幸甚の至りに御座候頓首。

○御相談の事　伊豆三島　賤が家の一女

皆樣方に御相談申上候、女學雜誌を拜見してお互ひに益を受しと幾層と云ふを知らぬ樣に侍れど、若し此迄お互ひ樣に經驗したことをお話し合ひ、たとへば私は斯うして家の内を調へたとか、又は斯うして辛棒したとか、斯樣に子供を育てた所ろが大層の過ちを仕ましたとか若くは成功しましたとか云ふ如きことを語り合ひ明し合ひ侍らば此上一層の益あらんかとふつゝか乍らに考へ出し候、若し同じ心の御方あらば何卒之より樣々の御經驗を投得して記者の引合を乞ひ妾等に御話しあらんことを只管らに祈る。

交詢

問の部

（一七）子供に見せる繪双帋に迄でオイランの繪がある程にて兎角好いオモチヤの無いに困ります、教育上効能のあるオモチヤ、遊び道具は何如なるものでしやうか（一人の母）。

（一八）娘共が小說好にて當時流行の小說を屢々買入ますがイヤモー不德義のものばかりにて年頃の娘共には何分にも讀ませ兼ねますが何か良き新刊も有之候はゞ御教示に預りたし（天保の親父）。

答の部

（一五）簞笥へ虫のつくのは桐の伐り時置き所にも多少は因りましやうが先づ簞笥を指すと木と木の合せ目に餅糊をつかひますからが元因です、時々風に當て床の高い處ろに置けば防げましやう（濱荻英子）。

●小說愛讀者女史　美妙齋氏は廿二、紅葉山人は廿三だそうです、南翠さんへは改進新聞に當てゝ送りなすつたら宜しひでしやう、若松しづ子は確かに女性ですが本名は分りません。

●學校の女生　Xmas.と書いてクリスマスと讀ませるは何か略字には相違ないでしやうが何如なる字の略したのですかとの問ひ、御尤もの問ひです、之はグリーキ文字のXと云ふ字を用ひたのですが、グリーキ字のXは英語のChに相應する音を備へてクリストと書くときの初文字であり升から、夫故其の初文字丈けなひて「クリスト」と讀ませ、之に「マス」の三字を加へてクリスマスと讀つゞくるのです●無名孃　ワキガは毛穴の下にある油腺に惡しき血の如きものが溜るのでつ

まり身躰惣躰の上からの結果ですから急に之を防ぐ工夫はないのです、然しますず成べくよく洗ひ、風通りを能くするか、若くは色々の薬を附ろ位が先づ効あろの法でしやう、前號にも廣告ありました、日本授産舘でも其薬を教へるやうですが矢張りお近しい醫者にお聞なさツて薬を貰ひなさろが宜しひと存じます●かろた女史　正月はとかく腹を痛めて困ろ何にか善い薬は無いかとの問、夫れは大かた餅を餘り多くたべたり、夜ふかしを爲さろからのとで、先づ之をお愼しみなさろが何よりもの良薬でありましやう。

以下編者不在中ゆへ社友しきたへ答へます

御尋　豊前中津に寓する　春江女史

一初學者が記事論說文を學ぶには如何なる書に就て學ぶか宜しく候哉。
但文躰は仮名まじり文　例は新聞雜誌の論說文の如き。

○記事論說文例と申すような本が多くありますがつまり書物の數を多く讀む事が必要です多く讀めば文章は自然に作れます。

一第百九十號の紙上に和文を學ぶには徒然草とか土佐日記とか云ふやうなものゝ註釋の本が宜しひですと有りましたが其つれ〴〵草土佐日記の註釋の價は幾何ですか又何處に注文すればいゝですか。

東京本町の中外堂へ御尋れ下さい同店には大層和書が多いようですから。

女學雜誌記者閣下小生は上帝の恩寵の下に起伏仕候一書生に御座候又近頃遊學の爲め上京仕り候者に有之候然るに茫々たる腦髓を半日の學科に苦しめ漸く下宿屋に歸り來り候へば元氣の何物たると德義の何物たるを知らざるの書生猥淫言耳を汚し心を亂し泥中に座するが如き心地せしむ小生は實に此境遇に困むものに御座候願はくは閣下神田區或は麹町區邊にて禁酒店或は信者設立の下宿屋或は信者にて宿泊せしめくれ候者無之候哉乍憚紙上を以て御返答願上候扨れ實に小生が必生の希望に有之候慈愛なる記者閣下此可憐青年の爲め御敎示を仰ぎ候。大和郡之助

○禁酒の道が十分に開けませんから禁酒旅店のようなものも東京にはありませんが記者はいまそのような下宿屋又は旅店等を作る人があればよいと思て居る處です、信者の書生さんは大抵教會の人々に頼んで下宿をして貰ひますが、貴方も何處かの教會へ趣かれて信者の方々に頼んで御覧遊ばせ。
但し前號にも廣告のあつた通り牛込新小川町一丁目一番地には赤心亭と云ふ禁酒下宿があり升

東京の某女學校卒業生で英漢學共に相應に出來る女子で米國へ文學研究の爲め留學致度と云ふものがありますが何分事情不案内でこまります何州の何女學校（大學が宜し）が完美のもので御坐りませうか又一ヶ月費用はドノ位あつたら居られましようか入學試驗にはドンナ學課をやりますか御伺申ます又序で故伺ひますが法學を學ばんとするには米國の何大學が宜しう御坐いませうか卒業年限は何年位て御坐いませう「ミチガン」大學とやらの法科は何年位で卒業になりませうか又入學試驗はどんなものをやりますか詳しく御教示を仰ぎます頓首

十二月廿九日　木碧沙明處主人

女學雜誌記者足下

再伸ミチガン大學の邊は衣食住の程度の低い處ろだと聞きましたが果してそうで御坐いませうか是亦伺ひます

ミシガン大學は景色もよう至て物價も安ひそうですがしかし月に少なくも四拾弗より三十弗迄の費用は入りましよう、女學の學校は隨分多いようですがバッサー、カーレージがよいかと思ひます法學の研究にはケンブリッヂがよろしひでしよう、費用は隨分、入りますから、左様御ばしめせ。入學試驗は普通のグランマー、スクールを卒業せしもので日本の高等中學の二年生位な學力があれば十分です。

通信問答

本月より通信女學を發兌しますが、其中の事に付きて色々と御質問がありましやう、其質問には一々御當人に答へるのですが、其答へは亦一般の人々に示しても益になるのがあると信じます、夫故此處に更に「通信問答」と云ふ一欄を添へまして、左樣な答を集めて掲げます、本號には先づ開場のしるしに一つ二を記し置ます、

通信女學は何如なる事を教へになるのですか　兼ても申します通り普通一と通りの女の心得は悉さく講義します、文章は成るべく分るやうに仕てありますから、何方にも讀めます。

一年で本當に卒業されましやうか　必らず卒業となるのです、今年一年ヂナンと御稽古を爲すつたら、イヤでも卒業します、其上は又た一層高等の各科を講義するともありましやうが、先づ一年丈の科をお學なすつても大層の益です。

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

時事

○諸大臣の奥様

東京新報の元旦附録には、岩村青木の二大臣を除ける諸大臣の奥方の肖像を載せたり、吾人は多年婦人社會に出入するゆへ相知れる閨秀も少なきにあらねど、かゝる雲上の御方々には絶へてお目にかゝりたるともなく、亦お目にかゝるべき緣故もなし、兼てより一度は尊顔を拜し參らせたしとも思ひたるが推して其堂に伺わんと甚だ禮なき心地し、今日迄で扣へたり、然るに今年は何の幸か新年早々うるわしき玉容を拜す、女學の爲め祝すべきと哉、見參らすに何方も氣高くおはすなり、中に必らずしも氣高からぬは定めし昔し良人と共に糟糠の苦を嘗め、維新革命の后ち頓かに昇進せられたる奥方と覺へ、是れ曩の日の平民にて居ますと思われて、更に一層目出たし。

○決闘を葬むる

汝ぢ言論の武器を用ひず、輿論の城壁に倚らず、正義の審判に訴へず、世を蠻野の昔しに忍びて亂りに人を殺さんとす、正に當今の御時世に入るべきものにあらず、一と度び頭を擡げんとしたるが、叩かれたり、今ま死して土中に埋めらるゝぞ實に汝ぢが相應の命なれ、須らく泣くとあく成佛すべし。

○壯士撲滅の策

中江兆民居士は自活青年の爲に下宿屋を開き、書籍を見せ説法を爲さんとせらるゝ折柄、北垣京都府知事は、世に稱する壯士は必竟我國教育法の不完全なるより生じたる者なれば、之を撲滅するには根本より苅除かざる可らず、故に壯士たるもの及び未來の壯士たらんとするものに其れ〳〵一の學藝を修めしめ獨立自營の道を與ふるに非ざれば到底其跡を斷つ可らずとの主意にて一篇の建議文を出されしよし、壯士に學問を教ゆるも一法なり而して亦た世に貴族的鬱積の弊害あるも亦た一の壯士撲滅法なるべし。

○月照と相原尙褧

相原尙褧氏の行衞不分明となれり、或は云く西國に渡たるの海中水に投じたるあらんと、憶ふ昔し君が短劍を揮つて板垣氏を岐阜に刺や、君はたゞ熱血國を愛するの誠忠よりしたり、幸か將た不幸か劔徹せず、恨を呑んで獄中に入る、獄裏光暗くして自由の理漸やく明けく、君默想して飜然前きの非を悟り、大赦にあひて世に再出するとき泣て昔日の惡敵に謝せり、時に云く生は之より北海道に行て開墾に從事せんと、而して

今や忽焉入水して死せり、思へらく紀伊の海波あらく、深夜人眠りて車響ひとり騷ぐ、丈夫万悔して復た勇を得ず、愁然天に拜して飛び失せつらんか、月照が辭世に云く、

大君の爲には何か惜しからん薩摩の瀨戸に身は沈むとも

人の月照を愛するは其精神の爲めか、或は其卓識の爲めか、若し之を精神の爲めにすと云はゞ相原氏の如き亦崇愛すべきの士にあらずや、嗚呼然かり士に尊とむ所ろは其精神にあり、然れども士亦た學びざれば遂に世を益することなけん、年少忠誠の友よ深く靜かに沈思する所ろあれ、吾人は甚たく此種の人の末路に痛感する也。

○英雄の末路

英雄の末路は人に支配せらるゝものなりと、は板垣伯が往々人に向つて歎ぜらるゝ所ろあるよし、伯が愛國公黨論中に左の如き節あり、

嗚呼力利用の弊は實に恐るべき者あるなり例之維新の後長州藩の如きは利用の弊を承けたる者なり彼の奇兵隊は壯士健馬長州藩の干城と爲り木戸氏等の如き同藩出身の維新元勳は此隊の力に賴て其志を成すを得たれば其功績も亦實に大なりと謂ふべし然るに奇兵隊を利用したるの餘弊は其跋扈殆んど制す可からざるの勢を致し木戸氏等は之を御するの術に苦みたり奧羽戰爭の際長州藩の兵には其門地家より編成せる先鋒隊あり其賤士輩より成立せる奇兵隊あり先鋒隊は白河口に當り奇兵隊は越後口に向ひたり先鋒隊は余が麾下の兵と俱に率ゐる所なりしが其強兵なりとて自ら誇りたる奇兵隊よりも其弱兵なりとて他に侮られたる先鋒隊が反て多く戰功を立てたり當時木戸氏は此事に就き余に語て曰く奇兵隊の跋扈は余殆んど之を御するの術を失へり然るに君の指揮に依り先鋒隊の戰功は其餘勢以て奇兵隊の驕りを制するに足り其勢の平均を致し初めて之を御するの術を得たり是れ實に君が賜なり厚く之を謝すと此奇兵隊は長州征伐の時に當り大に戰功を立て頗る鋭氣を恃み先鋒隊を侮り謂ふて曰く「麥の黒ん坊と先鋒隊の奴は鋒を揃へて出たばかり」と以て其狀を想ひ見るべし奇兵隊は終始戰亂の氣焰を收むる能はず明治維新の業既に成り武を偃せ文を修むるの時に際し長州に在て内亂を起し官軍の之を撃つや其功を助けられたる同藩在朝の諸士も同鄕在野の激徒が其罪を犯すに由り愛を割き涙を呑み同胞相屠るの慘を忍ばざるを得ざるに至れり其餘弊は豈深く之を警めざる可けん哉我黨慷慨義烈の諸士が逆境に處し國難に殉へ以て今日の氣運を致したるの功勞に至ては余厚く之を謝す然れども尙は今に及で其氣焰を收めざるは前者の覆轍を履まんことを懼るなり夫れ馬の奔逸する者は能く千里を致し士の剛強なる者は能く一世を凌ぐ然れども泛駕の馬と倜儻の士とは之を御するの術も亦實に難い哉。

伯の難義せらるゝ所ろ亦た推察すべし。

○俊助君と博文伯

伊藤伯が小田原に於て燒芋を好くやうになられしは喜こぶべきこと也、凡そ物には連感と云ふことあるゆへ、伯が久し振りにて其の湯氣蒸々たる處ろを喫せらるれば、坐ろに昔しの事を思ひ出して千々に感ぜらるゝ處ろあるべし、之は政治社會の爲に賀すべきこと也、然し此芋は元と薩摩に渡來したるものなり故に薩摩芋と云ふなどの由緣より嗜しまるゝことありては、反つて多くの人に不快を感ぜしむる也、其何れにてあるかと掛念する記者もあるよし、吾人には何れにても宜し。

○パアチル氏及報知記者

パアチル氏が甲比丹某の妻離緣の事に關係せりとて、外國の電信は之を線傳し來れり、吾人は彼の嚴正剛直なるパアチル氏の爲に之を信ずると能はず、亦之を信ずるを好まず、よし實にパアチル氏にして之に關係したりとも其冤罪は日あらずして雪白すべしと確信せり、報知新聞此の事を記して末文に云く、

風儀嚴格にして賣娼妓なきの社會には有夫姦多く風儀弛緩にして賣娼妓多き社會には此失行少し、得失の免かる可らざる實に斯の如き乎、

と、吾人は其歎聲の眞音何處にあるを聞くと能はず、然れども記者は寧ろ賣娼妓あるが爲に有夫姦少なきとを擇ぶものにあらざるか、若し不幸にして然らば吾々は敢て一言すべし、賣娼妓あるが爲に夫ある妻に姦するもの少なしとせば、之れ妻あるの夫が賣娼妓に姦する多きものにあらずや、有夫姦は減じて有妻姦を增し何をか得たる、嗚呼貞節の德は只だ女子に屬し、姦淫の罪は有夫婦人にのみ限れりと思ふと古來の大誤謬たり、新空氣を吸へるものにして尙ほ此如き誤謬に陷らば、抑も日本の道德を何如にせん。

○板垣伯の眞情

伯が立案に成る愛國公黨綱世に出でたり、其末文に云く、

余が始めに自由主義を唱へ終りに斯志を貫くに非ずんば余が生涯の事業は終始其全きを得ず余は自ら以て今人に對し且つ後人に對し未だ其責任を盡したりと爲さず余は天下の同志と相誓て斯業を創めんと欲し苦節を守り逆境に安んじ斃れて後ち尙ほ已まざらんとす余は自由神の爲めには犧牲と爲り自由軍の爲めには兵卒と爲り自ら誓て大に盡す所あらんと欲す今や各黨派相分れ同主義相爭ふの弊は愈々甚しきに至らんとす余は之を傍觀坐視するに忍びざるあり噫余一たび奇禍に罹りしも僥倖にして餘生を今日に保つを得たり玆に再び起て斯業を創むるに當ては死も亦惜むに足らず功名富貴は余に於て何か有らん余は唯斯業の成るを期す斯業にして一たび成らば之を守成する總理の任は世自ら其人あらん余は之に讓らんと欲する而已斯業たるや決して余一人の業に非ずして公衆の業なり余は偏に望むらくは天下公衆の業は天下公衆の力に成り公黨の名に負かざるの實を擧げんことを愛國公黨の名は舊しと雖ども其實は新しきを行ふべし同志玆に相呼んで相集まるの日は公議を採り公論に

據り新に綱領を定め新に結黨を成すべし、有恃文字躍り立ちて招くなり、昔し伯と共に運動したる人々は何故に之を冷々視する乎。

○去來何れか榮轉

各地方の二千石に左の如き更替あり、新舊知事を比較して別表となす、田舍茅屋の人願はくは幸福に增さんとぞ。

縣名	新知事		舊知事
神奈川縣	前外務省通商局長	淺田德則	沖守固
兵庫縣	前香川縣知事	林董	內海忠勝
長崎縣	前神奈川縣知事	沖守固	日下義雄
新潟縣	前廣島縣知事	千田貞曉	篠崎五郎
埼玉縣	前內務大臣秘書官	小松原英太郎	吉田清英
奈良縣	前內閣書記官長	小牧昌業	稅所篤
三重縣	前大藏參事官	成川尙義	山崎直胤
愛知縣	前愛媛縣知事	白根專一	勝間田稔
長野縣	前兵庫縣知事	內海忠勝	木梨精一郎
青森縣	前內務書記官	佐和正	鍋島幹
山形縣	前議官	長谷部辰連	柴原和
秋田縣	前法制局參事官	岩崎小二郎	青山貞
廣島縣	前青森縣知事	鍋島幹	千田貞曉
和歌山縣	前議官	石井忠亮	松本鼎
德島縣	前內務地理局長	櫻井勉	酒井明
香川縣	前山形縣知事	柴原和	林董
愛媛縣	前愛知縣知事	勝間田稔	白根專一
栃木縣	前警視總監	折田平內	樺山資雄
佐賀縣	前栃木縣知事	樺山資雄	石井邦猷

○臝躰畵却下

內國勸業博覽會へ京都府より出品したるものゝ中、一品の繪畵は不採用となりて退けられしよし、而して其畵は必らずしも出來あしかりしにはあらで、たゞ臝少女が觀世音に物を捧ぐるの圖なりしが故なる由、臝躰圖はいよ〳〵厭わるゝ也。

○世界周遊競爭の婦人

全世界周遊の爲め橫濱港に立寄りたるビスランド孃の事に關し、千葉新報に在桑港青柳郁太郎氏の通信を載せたり、左に之を轉載す、

世界を漫遊する者も夥しと雖、大概官用の爲か學問を研かんとて來る者なるが年若き婦人にして只一人三万里の長途を踏んで地球を一週せんと欲する者あり、其は何人ぞ、是れは此れニユウヨルク、ウオウルド新聞の社員にしてチリイブライてふ婦人なり、而して此婦人がニユウヨルクを出でしは去月十四日午前九時にして滊船に乘りて只一人飄然英國に向て出發し、世界一週を（七十五日間に）試むる由、嗚呼其膽の大なると實に驚くべき者にあらずや、之に付けても我國の婦女子が壁に向つて物いふに衣袖をもて其口を蔽ふといふが如きは誠に歎かはしき次第なり、（但し洗葉女生もあるべけれども、）然るに茲に又一人非常の女丈夫現れたり、前者は七十五日にて世界を一週する積りなれども、後者は七十二日間、即ち三日間早く一週する積りなりと云ふ、而して、これは如何なる人ぞといふに其名をビスランドと呼び、矢張りコスモポリタン雜誌社の一人なる由、而して何故に斯く前者よりは三日早く週遊するとを企てしやといふに、始め彼のブライ孃が七十五日間を以て週遊を試むるやコスモポリタン雜誌社の主筆ウオウカア氏は其同業者某氏とブライ孃の事に付き、彼れは世界を一週するに東よりして西に行けり、若し西よりして週るとを始めば七十五日は要せざるべしと云ひしに、某氏は痛く反對して否東より始むるが早しと云ひ、遂に一場の激論とるりしが、彼のウオウカア氏は奮然として曰く、今此座にて議論すると

も所謂坐上の水練なれば論より證據、我社員ビスランド孃をして競爭せしめん、ソハ面白し仕玉へとのとに、早速ビスランド孃を招いて談ぜしに、孃も餘りの不意なれば如何はせんと思ひしが、流石は米國人だけありて頓に承諾の旨を答へしが、遠き旅路に婦人の身にて急き出發するなれば家内の混雜、旅裝の準備、目眩ますばかりにて、同日の夜の滊車(急行列車)に乘じニユウヨルク府を出發し、即ち四日半にして去月十九日の朝桑港に着きしが、此く迅速に旅行する者は實に未曾有のとにして一時間内に時さしては六十五英里を疾走したる程なるがビスランド孃は桑港に着し、直ちに日本行の郵船に乘ぜんとせしが、生憎桑港を出帆の船なく爲に二日間程は空費せねばならずとて孃は頗ぶる煩悶し居れり、併し斯の如き急速の旅にしあれば、蓋し此通信よりも孃の行事或ひは先きならんかも知るべからず、實に目醒しき女丈夫共に非ずや、嗚呼米國は女子にして尙ほ斯の如し、何ぞ佐々木と梶原が其の先登を爭ひたる宇治川の談を貴ぶに足らんや。

○廢娼記事

厚生館演說　去四日夜六時より廢娼壯年義會の發起にて木挽町厚生館に大演說會あり、聽衆凡そ八百名、辨士は佐々木夫人病氣にて欠席し、古莊三郎、田井正一、石島良一、伴直之助、巖本善治の五氏なりき、聽衆大率ね拍手喝采し、會散の時には廢娼万才の聲堂内に鳴り響きたり。

廢娼雜誌　右廢娼壯年義會にては今月より「廢娼」と云へる雜誌を新刊せんとす。

放蕩者に勸告　下谷靑年會員は懇切なる勸告文を印刷し毎朝芳原の廓外に立ちて遊び歸るものに與へんとを計畫中。

連合大會　前橋に於ては六七の兩日上毛聯合靑年會の懇親會あり兼て廢娼連合會の事に付協議せらる。

三島　伊豆國三島に於ては去七日巖本善治を聘して廢娼演說會を催うしたり。

宮城縣　同縣會は去廿三日に於て廢娼の動議起りたるが最初は贊成人の數も多からぬ樣なりしが夜に入りて復た相談會を開き更に再議に附したるに陸續動議贊成現われ遂に十四番鈴木內二氏の「三ヶ年間猶豫を與へ二十三年度の賦金は之を徵收し二十四二十五兩年度は撿梅費のみを徵收して賦金を免除し廿六年度より斷然廢すべし」との說に三十二名の贊成者ありて之に可決し、議長は若生德三、佐々木兼三、劍持正剛、秋山峻、村松龜一郎の五氏に建議文起草委員を托し脫稿の上へ去二十七日議場に差出し更に第二次會を開きたる處ろ七番(阿部正太夫)は一動議を提出して曰く己に廢娼と決し三ヶ年を猶豫し明治廿六年より斷行すべきと決したる以上は今更其決議を飜すべしとにはあらざれども二十三年度に賦金を徵收するからは二十四、二十五の兩年度に之を廢止するの謂れなし依て其猶豫年間は通常の如く賦金を徵收せんとの議を發せしが反對者は之を駁し一旦多數を以て決したるものは動かすべからずと論じ決を取ぐるに及びて七番の說過半數の同意を得て遂に之に確定し早速縣知事に向つて建議したるよし同縣知事は果して之を認可するや否やは後報すべし。

關西靑年　去三日神戶英學館に集りたる二の神戶靑年會、及び兵庫靑年會は即今廢娼事業の爲に運動するを以て其事業とすべきとを決議す。

禁止稅　島根縣會に於ては殆んど禁止稅とも云ふべき重稅を科して漸次娼妓を廢滅するとに議決したり。

○廢娼論料

娼妓解放令

明治五年の昔し我明治政府は既に左の如き解放令を發布したるとありし也、

明治五年十月二日太政官第二百九拾五號布告

一人身を賣買致し終身又は年期を限り其主人の存意に任せ虐使致候は人倫に背き有まじき事に付古來制禁の處從來年期奉公等種々の名目を以て奉公住爲致其實賣買同樣の所業に至り以ての外の事に付自今可爲嚴禁事

一農工商の諸業習熟の爲め弟子奉公爲致候儀は勝手に候得共年限滿七年に過く可からざる事

　但雙方和談を以て更に期を延ろは勝手たるべき事

一平常の奉公人は一ヶ年宛たるべし尤も奉公取續候者は證文可相改事

一娼妓藝妓等年季奉公人一切解放可致右に付ての貸借訴訟總て不取上候事

右之通被定候條屹度可相守事

明治五年十月九日司法省第貳拾貳號達

本月二日太政官第二百九十五號に而被仰出候次第に付左の件々可心得事

一人身を賣買するは古來の制禁の處年季奉公等種々の名目を以て其實賣買同樣の所業に至るに付娼妓藝妓等雇入の資本金は贓金と看做す故に右より苦情を唱ふる者は取糺の上其金の全額を可取揚事

一同上の娼妓藝妓は人身の權利を失ふ者にて牛馬に異ならず人より牛馬に物の返辨を求むるの理なし故に從來同上の娼妓藝妓へ借す所の金銀並に賣掛滯金等は一切債るべからざる事

　但し本月二日以來の分は此限にあらず

一人の子女を金談上より養女の名目に爲し娼妓藝妓の所業をなさしむるものは其實際上即ち人身賣買に付從前今後可及嚴重の處置事

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

新誌

○朝野新聞

年を跨げて五週間の停止にあへる朝野新聞紙は大ひに激するもの丶如し、凡そ激情は一種出色の火を發す、况んや尾崎博堂君其の奇警慷慨の筆を提へて又た之に加わりたれば、朝野新聞は今后大ひに光彩を發すべし、兎角新聞のにぎやかなるは愉快なるもの也。

○森林太郎氏公娼論

廢娼論盛んに起りてより醫士にして之を痛論したるは森君を第一とす、衛生新誌第十二號に君が厚生舘に於て演説したる筆記「公娼廢后の策奈何」を載す、説未だ畢らずと云へども君が國家の爲に憂ふるの衷情文面に鬱勃たり、君が廢娼后の策は散娼監守に非ずして聚娼監守にありと云ふ、其方や丶經濟雜誌記者の旨に類す、吾人未だ全く之に滿足する能はずと云へども、其の邪媒（妓樓主人の如きもの）を惡くむの眞實極めて温かなるに至りては頗ぶる服する所ろあり、他の醫家衛生士亦た君の如き熱心あらんことを祈る、蓋し人はたゞ肉のみにあらず肉の爲めにのみ掛念して之を取扱ふべきものにあらざる也。

○婦人教育神洲の芙容

其第一號大坂淑徳會より發行したり、山田淳子同會頭にして京坂各地の教育家數十名賛成家に列し、恰も婦人雜誌中の「國光」とも云ふべき姿にて生れ出でたり、湘煙女史の「伯爵の令孃」と題す小説も見へたり、尙ほ追々と整備しいよ〳〵完美せんことを待つ。

女報

○皇后陛下の御仁惠　皇后陛下には客冬二十八日主獵局長山口正定氏を御前に召され贈正四位藤田誠之進氏の未亡人山口氏へ御手許より白縮緬一疋を賜りたる由に承る。

○中山二位局　は去る六日參内して例年の通り數鉢の盆栽を獻納したりと。

○高等女學校唱歌會　去る一日一ツ橋外なる高等女學校にては教員生徒の西洋樂器の唱歌合奏會を催され校友及び貴夫人數名參會せられたる由。

○女子師範學校の祝賀　高等女子師範學校の卒業生として各地方へ招聘せられし人々は新年祝賀を表する爲め上京せられしが去る一日同校に參集して相互に祝意を表されたりと。

○女子授産學校　潮田ちせ、佐々城豐壽兩夫人等が發起して前年來盡力せらる丶女子授産學校の爲めにとて此頃ろ米國メソデスト教會よりキヨルベツト孃と云へる教師來京ありしに付き近日いよ〳〵設校の計畫に着手せらる丶由。

○産婆免狀下附　東京府廳にて擧行したる昨年第二期産婆開業試驗に及第したる俣野らと外五十九名は本免狀千本松房外二十五名は假免狀を客冬二十五日東京府に於て下附せられたり。

○貴婦人園藝會　府下の貴婦人には今度園藝會を組織せられ春秋二季を以て順次各自の庭園に於て開會せらる丶答なるが本年の初會は來る三月下旬に催さる丶由にて夫迄に幹事其他の役員を撰擧せらる丶と云ふ。

○パリス大博覽會の美術部に於ては　出品者の數男よりも女が多かりし。女子出品者二百人餘、其八十は佛、廿は米、十五は英、其他其れ〴〵。

○米國監獄改良會　の新會頭は前の大統領ヘース氏。

○女子商業會　十五年前英國にてパダーソン夫人が創立したる女子商業會は獨立女事業家の連合を計るものなるが、現に會員七千四百五十人あり。

○週報

○官令　客冬二十八日法律第三十三號を以て地方稅及備荒儲畜金滯納者處分の件を裁可公布せらる同日勅令第百三十九號にて公文式中改正の件同第百四十號にて各省官制通則中改正の件同第百四十一號にて沖繩縣及東京府管轄小笠原島伊豆七島の國稅徵收の件同第百四十二號にて特備隊區司令部條例同第百四十三號にて陸軍豫備後備將校服役條例同第百四十四號にて陸軍豫備後備下士兵卒服役條例同第百四十五號にて陸軍歸休兵條例同第百四十六號にて海軍將校同相當官豫備後備服役年期の件を裁可公布せらる●四日法律第一號を以て保管金規則を裁可公布せらる同日勅令第一號にて神官職員官等表中追加の件同第二號にて政府に於て保管の義務を有する公有私有金に關する件を裁可公布せらる

○宮庭　元旦天皇陛下は宮中に於て四方拜の御式を行はせらる同日天皇、皇后兩陛下は正殿に出御在しまして新年の祝賀を受けさせ給ひたり●三日宮中に於て元始祭を行はせらる●去る六日宮中に於て新年の御宴を開かせらる

○政治　客冬二十六日公使舘參事官岡部長職氏外務次官に任ぜらる同二十七日元老院議官楠本正隆氏元老院副議長に任ぜらる同日山縣、西鄕、山田、榎本、青木岩村の五大臣は松方大藏大臣の官邸に會合せり同日遞信大臣伯爵後藤象二郎氏を勳一等に敍し旭日大綬章を賜りたり同三十日山縣總理大臣の官邸に於て臨時會議を開き西鄕、山田、大山、榎本、岩村、青木の各大臣は參集せり●四日政始に付き皇帝陛下は政廳へ臨御あらせられ在京の各大臣等は參朝したり

○銀行　東華銀行は客冬二十七日府廳の認可を得たり

○會社　株式取引所及び米商會所は去る四日發會せり●井上鐵道局長は去る六日歸京せり

○新誌　仙臺新報は本月より東北每日新聞と改題せり●四日朝野新聞解停せらる●美城日報は本年初刊より紙面を改良せり大阪の鷄鳴新報も同樣改良を加へたり

本校の學期は豫科三箇年本科四箇年にして別に二箇年に涉る高等科の設あり入學生は寄宿生百三十五名通學生百名を限とす毎科受持の教員は都合十八名中八名は外國女教師にして孰れも熟達善良あり規則書等御入用の御方は校長宛に御照會を乞ふ

麻布區鳥居坂十四番地

東洋英和女學校

廣告

看護婦生徒募集

本社看護婦生徒募集候條志望ノ者ハ廿三年一月三十一日迄ニ本社病院ヘ申込ムヘシ但シ年齡廿歲以上三十歲以下ニシテ獨身健康ノ者ニ限ル尙規則幷手續等ハ本社病院ニ就テ承合スヘシ

麹町區飯田町四丁目卅一番地

明治廿三年一月

日本赤十字社

●獻堂式廣告

日本メソヂスト麻布教會新築落成に付一月十二日獻堂式順序左の如く擧行す

午前十時より　說教　教師　小林光泰
　獻堂式　博士　マグドナルド
午後三時半より　英語說教　博士　ミーチャム
同　七時より　邦語說教　博士　イビー

日本メソヂスト麻布教會

●問　一年の計は春に在りと云ひ升、此一年は如何しましやう。答　何よりも先づ少し學問を爲さッては何如です●問　學問は勿論したいのですが此としては學校にも參られませず、獨りで稽古も出來ませぬから當惑し升。答　ナンノあなた學校にも行かず教師もなくて能く學問が出來ます、其は六かしい秘傳でもありません先づ次を御覽なさい

通信女學發兌廣告

一年で女の心得にある學問を手易く教授し家に居て用事の暇ま〱に稽古の出來る樣に仕組たるものにて文章は誰にも讀める程にやさしく其上尙ほ分らぬ時は手紙にて質問の出來る樣に致し、毎月一冊發兌し左の諸科目を教授す

家政學、作文法、和學、漢學、英學、万國史、日本歷史算盤、理化學、生理學、動植學、歌詠方、圖入地理、英學、

教師は醫學士三島通良、鈴木弘恭、本村祐吉、其他重も明治女學校の教員諸君に委賴し專はら親切鄭寧を主意とす○一冊二百頁にて一年二千五百頁とある之にて女子一と通りの學問を悉とく教授し年末紙上試驗を行ひ及第する者には女學雜誌社通信女學部卒業證を寄す○一年の計は春に在去一ケ年の徒らに過しことを思へば此一年是非とも心掛けて普通女學を修業する事肝要あり夫には一月最初の分より購讀せねば中途にて心付くとも既に遲し●一冊三十二錢にて全國郵稅なし半年分前金一圓八十錢同一年分三圓五十錢、女學雜誌と合せ購讀する者には各一割づゝ減ず○毎月十日發兌○

麹町區富士見町二丁目一番地

女學雜誌社

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

明治女學校生徒募集廣告

本校第二學年を終り來る十日より亦新たに第三學年の授業を始む、欠員ある級に限り試驗の上入學を許す、詳細の規則は本校に就て承知あるべし、入塾を望む者は塾生心得書を求めらるべし

東京飯田町九段坂上
燈臺の屹立せる處

明治女學校

弊店儀**新聞雜誌**賣捌營業仕居候處日に月に盛大の域に進みたるは全く江湖諸君の特愛と確信仕候就ては右御愛顧に奉答せんが爲**迅速活潑商務**從來に可仕候多々益々御注文の程奉希上候以上

勉勵

尚御便利の爲**切符**販賣仕候間多少を論ぜず御愛求を祈る

書籍新聞雜誌

女學雜誌特別賣捌所

仙臺市國分町五丁目

三成社 **佐勘書店**

生徒募集廣告

本所是迄本科生を限り傳習致し居候處今回歐米各國の衣服裁縫に熟練の敎師を聘し衆人の便利を量り更に速成科を追加し裁方縫方共懇篤に（和洋とも）敎授す有志の者は規則一覽の上入學あらんとを

本鄕區東竹町
二十五番地

渡邊洋服裁縫傳習所

注意社告

前金切の節は雜誌の封紙に朱印の半錢形を捺す、之によりて前金を廻送あれ、然らざれば一時發送を見合す。

代金を送らるゝには通運便又は郵便小爲替にて麴町郵便局へ當て御振込被下候樣奉願上候。

發兌

一月。	一日	十一日	十八日	廿五日	
二月。	一日	八日	十五日	廿二日	
三月。	一日	八日	十五日	廿二日	三十日

定價

一册。六錢	郵税。五厘	（但府內無郵税）	
十册。五十八錢	郵税。五錢	（同前）	
半年分	一圓四十三錢	府外は	一圓五十六錢
一年分	二圓六十錢	府外は	二圓八十六錢

廣告

一行	一回	（廿七字詰）	前金拾錢
同	三回以上		一割引
同	六回以上		二割引

十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し不道德なる事物の廣告は謝絶す有益なる事物の廣告は社議の上無代價にて引受く女學關係の書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評すべし

WOMAN'S MAGAZINE.

"JOGAKU ZASSHI."

Price 6 *sen*. By post *yen* 1,56 six month *yen* 2,86 per annum, in advance.

Edited and Published by Y. H. Iwamoto, at The Jogaku Zasshi Office, No. 1B. FUJIMICHO 2CHYOME, KOJIMACHI, Tôkyô, Japan.

明治二十三年一月十日　印刷
明治二十三年一月十一日出版

發行所　東京麴町區富士見町二丁目一番地　**女學雜誌社**

編輯兼發行人　東京麴町區富士見町二丁目一番地寄留　**巖本善治**

印刷人　東京神田區三崎町壹丁目十三番地寄留　**森田豊**

遞信省認可